

---

# 魔法皇帝ラインハルトStrikerS

無目藻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法皇帝ラインハルトStrikers

### 【Nコード】

N1819V

### 【作者名】

無目藻

### 【あらすじ】

新銀河帝国初代皇帝 ラインハルト・フォン・ローエングラム。

彼は25歳の短命でこの世を去った。

去った、はずなのに。彼はなんとリリカルな世界へ神様の気まぐれで飛ばされてしまった！

混乱するラインハルト。そして、次々に現れる『やつら』。

仲間にロイエンタールとオーベルシュタイン（子供）を加えて物語は突き進んでいきます。

御感想、待ってます。

感想がいきる力となります

銀河の、そして時空の歴史がまた1ページ  
・・・

## プロローグ ラインハルト、飛ばされる（前書き）

もしかしたら、キャラ崩壊とかあるかもしれませんが、極力無く  
すと作者が言っていましたby ユリアン

## プロローグ ラインハルト、飛ばされる

新帝国暦3年（宇宙暦801年） 7月26日

銀河帝国皇帝 ラインハルト・フォン・ローエングラム 死去。  
享年25歳。

彼が皇帝でいた期間は僅か2年足らずだった。  
しかし

神は彼をヴァルハラへと送らなかった！

「・・・ここは？」

ラインハルトが目をさますと、そこは無限に白い空間だった。

「ぬしが、ラインハルト・フォン・ローエングラムじゃな？」

「!?!」

振り向くとそこには一人の老人がたっていた。

「卿は何者だ？」

「わしか？わしゃあ、神様だよ」

神？神って、あのオーデインとかみたいなああの偉大なる神？

・・・・・・・・・・・・・・・・

「卿は俺を馬鹿にしているのか!?!」

「いやいやいやいや! 違う! 本当に神なのじゃ」

ラインハルトは疑いながら少しだけ信じることにした。

自分は訳のわからない空間におり、必然的にこの老人を頼ることになるのだ。

「それよりラインハルトよ。お主の姿、少しいじくった。見るか？」

老人はいきなりそんなことを言い出し、大きな鏡を秘書らしき人物に用意させた。

「！これは・・・」

そこに映っていたのはまだ皇帝になる前の 親友、ジークフリード・キルヒアイスと広い大宇宙に共に想いを馳せていた頃の自分であった。

「どうじゃ？ 気に入ったかの？」

ラインハルトは悔しかったが、少し嬉しい。

「まあ、なんだ。礼は言っておく」

「それじゃ、出発じゃな」

「・・・は？」

言うなり、老人は小さなスイッチを取り出して、ポチッと押した。次の瞬間、ラインハルトの足元に穴が開き、彼は珍しく叫び声をあげながらその暗い闇に落ちていった。

新暦0075年 ミッドチルダ首都クラナガン郊外 リニアレール  
バトルサイン  
「生命反応？」

「そうなの。あの列車に急に。二人で調べてきてほしいの」

エリオ・モンドリアルは今回が初陣である。

そして、先程敵のガジェットに放り投げられて危うく死ぬところだった。

すなわち、くったくたである。

そんな僕を再出動させるのはさんは鬼なのではないか。そんなことも思い始めた。

しかし、いくらなんでも一人で行かせない。なのはさんは教導官の一人をつけてくれた。

「なんか、二人が並ぶと親子みたいだね」

フェイトは二人が並ぶと必ずそうコメントする。

だが、確かに親子のようだった。

エリオはこの教導官を尊敬していた。

実力があるのにおごらず、大きな体からは優しさがにじみ出てい

る。そして、責任感の強さ。

エリオは大人になるならこの人のようになりたい、と何時も思っていた。

「それじゃあ、エリオ君。行きましようか」

この人も、燃えるような赤毛の持ち主だった。

「はい！」

二人は飛び出した。

エリオのは本来キャロが飛竜のフリードで輸送されるのだが、今回はその教導官に運んでもらう。

キャロの体力というかいろんなものが限界なのだ。

「頑張つてねエリオ、それに……」

フェイトの咳きはヘリコプターのローターの音にかきけされた。

そもそも独り言なので誰も聞いていなかった。

時空の歴史がまた1ページ……

## プロローグ ラインハルト、飛ばされる（後書き）

どうでしたでしょうか？ご意見、ご感想は作者の健康状態を底上げします！



ラインハルト 友に会う(前書き)

ラインハルトが赤毛ののっぽさんに会います。

## ラインハルト 友に会う

ラインハルトは肩に人の温もりを感じて目を覚ました。

「ん……」

まだ彼の意識は朦朧としていたが、その瞳には赤く燃えるような頭髪が映っていた。

「……キルヒアイス？」

「僕はキルヒアイスさんじゃありません。僕はエリオ・モンディアル。時空管理局三等陸士です」

確かに、よく見るとキルヒアイスではなかった。赤毛は同じだが、顔立ちが違う。てか子供だ。

ラインハルトは辺りを見回した。どうやら列車の貨物室らしい。

彼は「時空管理局」や、このような子供 まだ9歳か10歳の子供が、軍人まがいの存在であることに多少の興味を覚えた。

が、しかし。

ラインハルトはそのエリオという少年の台詞づかいに違和感を感じた。

『キルヒアイスさんではありません』

「あの、とりあえず、名前を」

エリオがラインハルトに問いかけた瞬間、部屋の扉が勢いよく開かれ、薄暗かった室内に強烈な光が射し込んだ。

一瞬目が眩んだラインハルトだったが、逆光に照らし出されたそのシルエットは彼によい意味で衝撃を与えた。

「ラインハルトさま……！」

「キルヒアイス……キルヒアイスなのか!？」

ラインハルトは信じられなかった。キルヒアイスはガイエスブルク要塞でアンスバッハの魔の手からラインハルトを護り、非業の死を遂げた筈である。

しかし、現にキルヒアイスは生きている。その脚で、大きく活力

に富んだ肉体を支えている・・・！！

「キルヒアイスさん、知り合いですか？」

「エリオ君。の方がラインハルト・フォン・ローエングラムだよ」  
「えっ!？」

エリオ少年はキルヒアイスとラインハルトを交互に見て、惚けたような顔をした。

「キルヒアイス、なんだ？お前先生でも始めたか？しかもイカした服を着て」

ラインハルトは顔をほころばせ、親友に語りかけた。彼がこのように話したのはどれだけぶりだろうか。

「はい、まあ、先生みたいなことはやっています。この服についてはまた後ほど」

キルヒアイスの着ている服は帝国軍の軍服をイメージさせる軽めの鎧といった感じで、似合っていた。

「うん。お前は本当に先生がお似合いだ。生徒から好かれるだろう」  
「いえ、そんな・・・あっ！」

キルヒアイスは急に姿勢を正した。口元には柔らかい笑みが浮かんでいる。

「ラインハルトさま、ついに、宇宙をてにしたのですね。おめでとうございます」

「有難う。でも、俺一人の力じゃない。お前や、ヒルダ。それにミッターマイヤーや・・・何でお前はその事を知っているんだ？」

ラインハルトが怪訝そうな顔をして、キルヒアイスはクスと笑った。

「ちょっと、さるお方から聞きました・・・」  
「なんだキルヒアイス。もったいつけるなよ」

ラインハルトがそう言い終わる前に迎えのヘリコプターが近くまで来ていた。

「ラインハルトさま、この話はやはり後ほど。ちょっと失礼します」  
そう言うキルヒアイスはラインハルトの胴体を抱え、飛翔した。



ラインハルトは今日にした人物を理解するのに数秒を要した。  
そして、その信号が脳に到達した瞬間、ラインハルトに電流が流れた。

「け、卿は……!!」

続く

次回予告

揃いつつある役者たち。彼等はここミッドチルダで居場所を見つけてられるか？

そして、ラインハルトのデバイスも明らかに！

次回

ラインハルト 闘う

時空の歴史がまた1ページ・・・

ラインハルト 友に会う(後書き)

この男性、大抵の人はわかったでしょう。

ラインハルト、闘う(前書き)

奴が登場。

## ラインハルト、闘う

「ヤン！？ヤン・ウエンリーではないか！？」  
ラインハルトは目を見開いた。

常勝の天才ラインハルトと不敗の魔術師ヤン。

銀河を舞台とした二人とそれを取り巻く様々な人物の織り成す壮大な演劇は一度幕を閉じた。

しかし、幕が閉じたのはその間の小休憩を挟むためであって、ラインハルトとヤンは新たな舞台で再び縦横無尽に駆け巡るのだ。

「やあ、ローエングラム候。次元漂流者というのは貴方のことだったのですね」

今のヤンは同盟軍の軍服ではなく、茶色を基調とした管理局地上の制服である。ちなみに、キルヒアイスも同じものを着ている。

「ヤン元帥は、現在三尉 少尉相当の階級です」

キルヒアイスがそつと耳打たした。

かつて元帥であった男が三尉という階級に甘んじているのは恐らく管理局に入ることになったとき、かつての階級を偽ったのだろう。

皮肉なことに、ヤンはお世辞にも元帥としての風格はなく、すんなり通つたらしい。

キルヒアイスもそうしたらしい。それなりに階級が高くて権限があり、なおかつ自由に行動できるものとして階級を聞かれた際に少佐と答えた。

そのため、彼は一尉という階級を持っている。

しかし、思えば、彼から耳打ちで秘密の話が聞かされるのは何年ぶりだろうか。

「貴方が、ラインハルト・フォン・ローエングラムさんですね？」

ヤンの前に座っていた女性が立ち上がり、言った。



恐らく、19か20の娘だろう。階級章から佐官であることが知れた。

（優秀な娘なのだな）

ここは恐らくかつての帝国、ゴールデンバウム王朝と違い、門閥貴族が優遇されるという愚の骨頂とも言える制度は採用されていないだろう。

優秀な人間は好きだった。

女性としてではなく、彼女がもつ能力が、である。

そんなラインハルトが品定めしている相手も、彼のことを品定めしていた。

（うひゃあ、これは最早芸術品の域やな）

はやてが表現した方法は何年にもわたり帝国、同盟の両国で使い古されたありきたりな表現方法だったが、それが彼の容姿を最も適格な表現方法なのである。

ラインハルト氏からは強い魔力反応が感知されているという。ということとは、彼には魔導師としての素質があるのだ。しかもかなり強力な。

考えてみれば数年前にやって来たというキルヒアイスも魔導師としての素質があつたらしい。

彼女は考えた。

この人が欲しい。

保護をしたら協力してくれると言った、といえば正式な局員ではないため、総合魔力の規定には引つ掛からない。

そんなことを考えている自分はつくづくたぬきだなと思った。

海上訓練スペース・・・

「デバイス？」

「はい、ぼくのはここに来た瞬間から持っていました。ラインハルトさまのは？」

キルヒアイスが首にネックレスのようにかかっているデバイスを

見せてくれた。

帝国の印を模したものだ。

「俺の・・・デバイスか・・・」

ラインハルトは、はっ、と思いだし、首にかけているものを取り出した。

それはひとつのペンダントだった。

キルヒアイスが死に、アンネローゼと別離してから、これはラインハルトの心の支えだった。

「それがデバイスならセツトアップ、と呼び掛ければ大抵もとの形状になりますよ」

キルヒアイスに言われたことを試してみる。

「セツトアップ」

刹那、ペンダントが光を放ったかと思うと、それはあつという間に形を変化させた。

彼のデバイスは美麗なる彼にふさわしく、美しい白色で、貴婦人を連想させた。

《はじめまして。私は貴方のデバイス、ブリュンヒルトです》

ラインハルトは驚いた。その理由は二つある。

ひとつは、彼のデバイスの名が彼が愛していた船と同じ名前だったこと。

もうひとつは、そのデバイスの声が彼の妻、ヒルダことヒルデガルトと同じ声だったからだ。

《どうされましたか？》

「あ、ああ。ヒルダ じゃなかったブリュンヒルト。俺にはキルヒアイスみたいなイカした服はないのか？」

ラインハルトの質問は彼らしからぬものであった。

恐らく、彼の長年抑圧された精神が解き放たれ、少し童心に帰っているのだろう。

《はい、可能です》

「それでは、頼む」

《了解》<sup>ヤー</sup>

次の瞬間、彼の体は黄金の閃光に包まれ、光が晴れるとそこには壮麗たる長髪の男性が立っていた。

「・・・て、これいつもの格好ではないか！」

ラインハルトのバリアジャケツトは皇帝の服と寸違わなかった。それを見たキルヒアイスは嬉しそうだった。

『それでは、攻撃目標を出しますね〜』

なのはの声が響いたかと思うとブリュンヒルトが300メートル先に敵がいると報告してきた。

ラインハルトは地面を蹴り、空へと舞い上がった。

高い場所からだ敵のようすがよく見える。

楕円形をした機械は訓練スペースの建築物の合間を滑っていた。

「ブリュンヒルト、俺が魔法使いなら魔法は使えるのだな？」

ブリュンヒルトははい、と答え、ラインハルトに教えた。

《最も基本的な呪文は『ヒルデガルデブー』となっています》

ラインハルトは「ハアツ!？」と聞き返した。

この呪文は同盟進攻前に会議でミッターマイヤーが言っていた呪文である。

「な、なぜそんな恥ずかしい呪文なのだ!？」

《私が作られる際、閣下の記憶から閣下の印象に残ったものをもとにしましたので》

つまり、かつてミッターマイヤーが悪のりでいった寒いギャグが不覚にもラインハルトの脳に焼き付いていたということだ。

はつきりいつて嫌ではあったが、やらないことにはなにも始まらない。

「ヒ、ヒルデガルデブーっ！」

すると、ラインハルトの周りに黄金色に輝く光の塊がいくつも出現した。

《これに命令を出して地上の敵を攻撃してください》

「なるほど、では」

ラインハルトは腕を振り上げた。そして、号令と共にその腕を降り下ろす。

「ファイエル！！」

その滑らかで美しい一連の動作に答えるように光の塊は不規則な軌道を描きながら地上に吸い込まれていった。

だが、魔法初心者のラインハルトには光の塊　アクセルシューターの一種だが　を完全に制御するのは至難の技で、15個出現させた内13個が目標に当たらず訓練スペースに穴を穿っただけだった。

しかし、ラインハルトの行う動作一つ一つは美しい以外に形容できないもので、見学者を魅了していた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。ホントおもしろい人ばっか連れてきて、ウチ嬉しいわ」

「まだ魔法はうまく使えてないけど、ちょっと練習すれば伸びると思うの」

キルヒアイスは空を駆けるラインハルトを見ていた。

マントを翻し、黄金の髪をなびかせる姿は神々しい輝きさえ放っている。が、その神々しさのなかに彼がまだミューゼルを名乗っていた頃の若々しい活力が見え隠れしていた。

その証拠に、あの顔の楽しそうなこと・・・！

そんなラインハルトはついに自分好みの魔法を見つける。

「ゴールデン・フリート！！」

ラインハルトがそう唱えると、彼の周囲に数百からなる帝国軍の艦艇のミニチュアのようなものが出現した。

一つ一つは1メートル弱と小さいが、しっかりと空を飛び、その存在がただの飾りではないことを主張していた。

《この艦隊は閣下の命令通りに行動します》

「おお、これはすごい！！」

ラインハルトは目を輝かせていた。

それにしてもこれ程のものを出せるとは、魔力が安定している証拠である。

ラインハルトは意気揚々と地上の敵の掃討を始めた。

シャーリイはラインハルトの力に驚いていた。

なのはやフェイト、はやてにキルヒアイスとはまた違った強さをもつラインハルトは彼女の知的好奇心を掻き立てた。

「ああ！あの統一され秩序を持ったあの動きは安定した魔力を持たないといけない！彼はこれまでにないタイプの魔導師ね！！」

そんな興奮する彼女のところに一人の男性がやって来た。

「あつ、ヤンさん」

「やあ、彼はどうだい？」

「見ての通りです。ラインハルトさん、魔法で艦隊を作っちゃいましたよ！」

ヤンが見ると、確かに帝国軍の艦艇が敵を掃討している。

「これに対抗できるプログラムがなくて、データがとれないんですよ」

シャーリイが言った。

ヤンはそれで少し考え、口を開いた。

「ちよつと、私に任せてくれないか？」

ラインハルトは敵を一角に追い込み、一斉射を行おうとしていた。

そして、号令を出した。

「ファイエル！」

しかし、放たれた攻撃は先程まで敵がいた空間を裂いただけであった。

「！？」

『ラインハルトさん、貴方の新しい撃破目標なの！上を見るの！』

ラインハルトは上を向いた。そして、息を飲んだ。

数はラインハルトの艦隊とほぼ同数であろう。

緑色を基調とした無骨な艦艇の数々がラインハルトの頭上を飛行していた。

それは紛れもなく同盟軍の艦隊。

そして、それを操るのは、ヤン・ウエンリーだった。

#### 次回予告

ラインハルトとヤン。二人が再び衝突する。

ラインハルトはヤンに勝つことは出来るのか？

#### 次回

ラインハルト、魔術師と戦う

時空の歴史が、また1ページ・・・

## ラインハルト、闘う（後書き）

キャラクターで間違いがあれば 教えてください。

ちなみに、ヤンは機動6課所属ではありません。

詳しいことはまたこんど。

魔法の呪文は実際にミッターマイヤーがCD かなにかでいつてました。

ラインハルト、魔術師と戦う(前書き)

眠い上に短いからスツゴい駄文に。  
あとヤツが登場します。



## ラインハルト、魔術師と戦う

新暦0075年 この訓練場で、二人の英雄が再び相打つ。

突如ラインハルトの頭上に現れたミニ同盟軍艦隊。

その数、ラインハルトのミニ帝国軍艦隊の約2倍。

「ちよつとヤンさん！卑怯ではないですか？」

なのはがヤンに抗議した。

しかし、ヤンは反論する。

「戦術は、まず戦略的に数的優位に立つことが大前提だ。奇跡ミラクルや、

魔術マジックが発生するのは極めて異常な事なんだ」

「でも、これは模擬戦なんやし」

「模擬戦は実際の戦闘を再現するものなのではないかね？私は、そもそも補給線や拠点が存在しないただのガチンコ勝負を模擬戦と呼称することがおかしいと思うよ」

はやての意見もヤンに一蹴され、なのはとはやては二人で肩をすくめた。

「あれ？そういえば、フェイトさんがいませんけど？」

ここで、キャロがフェイトがいないことに気づいた。

「ああ、彼女には一寸した頼み事をしていてね」

そんなことをしている間に、ラインハルトも艦隊を布陣させ終わっていた。

ついに、始まりである。

その艦隊戦はほとんどの者には何がスゴいのか解らなかった。しかし、はやてとティアナはお互いの艦隊運動を見て息を飲んだ。

見ている限り、ラインハルトというライオンがヤンというゾウに襲いかかっているようだった。

しかし、ヤンも柔軟な機動で鋭いラインハルトの牙をかわし、その絶妙なタイミングで大きな牙を繰り出していた。

それをラインハルトも素早くかわすものだから、決着がつかない。結局、その日は中止となった。

その事をキルヒアイスが念話でラインハルトに伝えた。

『ラインハルトさま、今日のところはお開きだそうです。ヤン提督、いえ、三尉も仕事がありますから』

『何？しようがない。ところでキルヒアイス。これは何だ？』

「これ」とは念話のことだろう。

『念話、というものです。特定の相手とテレパシーのようなもので会話ができます』

『ほう、それは便利だな』

ラインハルトは魔法というものに興味を抱いているようだ。

この事はキルヒアイスにとって非常に喜ばしいことであった。

首都クラナガンのダウンタウン。

その一角に一軒の居酒屋があった。

労働者達がその日の疲れを癒す汗臭い憩いの場に一人の女性が入ってきた。

その女性は息をのむほど美しかったが、誰も声をかけないのは彼女の胸に光る執務官バッジと黒い制服のためだろう。

その女性 フェイト・T テストロッサ ・ハラオウンは店の奥へと進んでいき、一人の男の前で止まった。

30代も後半に差し掛かったであろうその男はフェイトの存在に気付き、たくましい身体と鋭い眼光を彼女へ向けた。

フェイトは一瞬息が詰まるかと思ったが、一瞬の後、男の顔は柔和なものへと変化していた。

「どうされましたかな お嬢さん フロイライン？」

フェイトは襟を正し、男を見据えた。

「貴方は、今日6課隊舎に来るはずだったでしょう？」

彼女は今日渡すはずだった書類を手渡した。

それは6課配属の辞令である。

「俺は、あの人の命令以外は聞きたくないのだがな・・・む？」

男は推薦人の名を見て固まった。そして、少し笑った。

「陸士108ヤン・ウェンリー三尉・・・はっ！三尉。あの人らしい」

男はガタツと席をたち、フェイトに敬礼しながら言った。

「ワルター・フォン・シェーンコップ三佐、慎んで、拜命致します！」

ついに揃いつつある役者たち。彼等はこの世界で生きていけるのか？

時空の歴史が、また1ページ・・・

今回よりたまにスペースを少しでも埋めるため「エリオの機動6課日記」を書いていきます。

モトネタは勿論ユリアンのイゼルローン日記。

月 日

キルヒアイスさんに日記を書くことを進められたのを機会に日記をつけていこうと思う。

いつまで続くかはわからないけど、男なら続けるべきだろう。

この事を訓練の休憩中にキャラ口に話したらそれはいいことだと言った。

「日記をつけるのはいいことだよ。ま、私はやらないけど」  
なんで、と聞くと

「え、だって二人で日記つけてて似たような内容になったらお互いパクつたるって疑心暗鬼に陥りかねないじゃない」

と言われた。

その時は納得しちゃったけど、今考えるとワケわかんない持論だったと思う。

キャラ口は単にめんどろなだけだ。

## 台風来る(前書き)

最初はシェーンコップオンリーにしようと思ったけどやめました。

## 台風来る

その男は例えるなら秋にやって来る超大型台風だった。

ワルター・フォン・シエーンコップ、年齢は38歳。

やって来たのは三年前。次元漂流者である。

初めは民間協力者としてかかわっていたが、管理局要人救出の際にその辣腕を発揮し、異例のスピード昇進を果たす。

魔導師ランク 陸戦B 空戦C。しかし、実質、陸戦SS以上である

シエーンコップは機動6課の部隊長室にいた。

「ワルター・フォン・シエーンコップ三佐……。ヤンさんとはどう言った関係で？」

「ヤンは私の部下でした。射撃も格闘もできないヤツでね、穀潰しのヤンとか言われてたな」

これは半分嘘で半分本当である。

ヤンは薔薇ローゼンリッターの騎士連隊の一員ではなかった。しかし、かつて穀潰し呼ばわりされていたのは事実だ。

「そうですね。まあ、その話はそれくらいにして、シエーンコップ三佐、実はな、ウチの部隊でもう二つくらい小隊を作りたいと思っとなるんよ」

「その内の一つの隊長を、小官に任せるのですか、八神二佐」

「はやては無言で頷いた。」

シエーンコップは辞令を受け取り部隊長室を後にしようとして扉を開き外に出た。

しかし、そこにかつての上官の姿を見た。

「これはこれはヤン提督。今回はどうも」

「何度も言うようだけど、今は三尉だよ。……シエーンコップ三佐殿」

シェーンコップは苦笑した。

「どうだい、機動6課は？」

「部隊長は、まあ、悪くはありませんな。それにしても若い」

「ローエングラム候は19歳で大将だったよ。それに比べればまだまださ」

と、いつてもラインハルトは別格だ。他の人間が地を這っている時も彼は大空を駆けていた。

「そういえば、そのカイザーもここに来ているようではありませんか？」

「うん、そうだよ。くれぐれも、問題を起こさんでくれよ」

シェーンコップは微力を尽くしましょうと言い、大きく笑った。

機動6課は男性が極端に少ない。

創設の時、フォワードで男はエリオとキルヒアイスだけだった。そのようなこともあり、エリオにとって男性が増えるのは喜ばしいことである。

\*\*\*\*\*

ラインハルトがくしゃみをした。

「どうされましたか？」

「何だか変な気配を感じた・・・」

ラインハルトはキルヒアイスとエリオからこの世界についてレクチャーを受けていた。

どうやらキルヒアイスも時空管理局という治安維持組織に所属しているようだ。

(それにしても、なんか胡散臭い組織だ)

彼の時空管理局に対する第一印象はこのようなものであった。

「魔法を推奨しているのか。なんでだ？」

ラインハルトの質問にエリオが答えた。

「詳しくはわかりませんが、質量兵器とちがって、魔法はクリーンで安全だと」

「質量兵器？」

「拳銃からミサイルといった兵器のことですよ」

これにより、魔法を使える魔導師は世界に欠かせないものなのだそうです。

「しかし、魔導師という人種はそうホイホイ出てくるものではないそうなのです」

「ん、まてまて。じゃあ、どうやって魔導師を集めるのだ？」

この質問をした瞬間、キルヒアイスの瞳に静かな怒りが見えた。

しかし、それがラインハルトへ向けられたものではないことは明白であった。

「優秀な魔導師や魔導師の資質があるものを現地より徴収しているのです」

ラインハルトは絶句した。

それは半ば拉致ではないのか？

時空管理局は法の守護者たる存在ではないのか？

「ここの高町一尉やハラウン執務官、八神部隊長はその口ですね。もともと、本人たちの希望でもあるそうです」

「ふむ・・・」

ラインハルトは視線をエリオへ移した。

「エリオは9歳だったな？そもそも子供をこのような軍隊紛いの組織で階級を持ち命のやり取りをしている時点でおかしい！人手不足にもほどがあるだろう！」

「でも、僕は自分の意志でここにいます。僕は、フェイトさんに恩返しをしたいんです・・・」

ラインハルトがここで言葉を切ったのはエリオと自分の共通点を見たからだろう。

ラインハルトは愛する姉を皇帝の手から救い出すために、その為の力を得るために軍人になった。エリオはフェイトに恩返しするた

め、彼女を守れるほど強い騎士<sup>ナイト</sup>になるために管理局に入った。

どちらもスケールは違えどにたようなものではないか？それに自分が決意したのはエリオほどの頃ではなかったか？

ラインハルトはこのようなことを考えた。

エリオ・モンドリアル。なんと出来た子であろうか。

「どちらにせよ、ここまで人手不足なのは際限なく管理世界を拡大したからだろう・・・完全に管理局のミスだ・・・」

あそこまで考えて意志を変えないのはラインハルトの長所であり短所だ。

エリオの伏せた視線がラインハルトの心に深く突き刺さっていた。

エリオの機動6課日記

○月 日

ティアナさんに昼食をおごってもらった。

僕は大吃いなだけけれど、まさかスバルさんまでここまで食べるとは予想外だった。

「食べることは人が生きていくには必要な事だから。それに、食べれるときに食べとかなないといざというときに体が動かないでしょ」

それには激しく同感だ。

スバルさん、キャラコ、そして僕はお腹いっぱい食べれて（午後の訓練がなかったから）満足だったけどティアナさんの財布は僕らのお腹に反比例していたようだ。

もうおごってもらえないかもしれない。残念。



## 台風来る（後書き）

読んだ人全員が思ったと思いますが、シェーンコップさんがこの世界にやって気来たという時期。なんと3年前。あれ？おかしくね？そう、おかしいのです。

というわけでその説明を

「お待ちください」

貴方はだあれ？

「時空管理局本局執務官補佐二等陸尉、アンドリユー・フォーケです」

おお、フォーケ二尉、どうされましたか？

「その説明、小官にお任せください。この世界ともとの宇宙歴の世界は平行です。しかし、我々がここへやって来たのはそう、気まぐれ神様のせいです。ですから、肉体的に若返っててんでばらばらな時代にやって来るのです」

なるほど、ということとはもとの世界ではおじさんだった人も若返って様々な時代へたどり着くのですな。

「そうです」

しかし、それではヤンやキルヒアイス、ラインハルトはどうなる？彼等は死んでそのまま平行にある時代へやって来たではないか。シェーンコップは三年前にやって来て「スピード昇進を果たした」となっているがキルヒアイスの話によるともといいた世界での階級によって階級が決まるらしいぞ？と言うことだ？

「・・・小官の説明にけちをつけるのですか？」

まあ、そうだな。分かりにくいし。

「・・・」

単に設定が曖昧なだけではないか？

「・・・！！」バタン！

あっ、倒れた。どうしたのだ？

「どうも、医者です。彼は転換性のヒステリーでね、挫折感が異常な興奮を引き起こして視神経が一時的にマヒするのだ」

「なんだと!？」

「まあ、彼の言うことを全面的に肯定すれば大丈夫だよ」

「そんなことができるか! 読者に申し訳ない。て言うか作者がまとまらない変な設定をフオークに押し付けただけではないのか？」

「さー、どーでしょー」

## 新部隊

設立して間もない機動6課だったが、フェイトの執務官の仕事が予想以上に忙しかったのに加えラインハルトの登場が重なって部隊編成を改編することになった。

「と、いつても改編するのはライトニング分隊だけやけどな」

「私は、何かと単独行動が多くなるから。ちゃんとした隊長の方がエリオとキャロのためにもなるしね」

フェイトがそういうとはやてに書類を手渡した。

「それじゃ、ライトニング分隊は解散や。それで、今日付けでエリオ・モンディアル三等陸士とキャロ・ル・ルシエ三等陸士は」

「ええっ！？それは本当？」

「本当だ、ヤン三尉」

今、ヤンとラインハルトは談話室にいた。キルヒアイスは訓練場に出ている。

ラインハルトがヤンに伝えているのは旧ライトニング分隊メンバーの配属先についてである。

ローゼンリッター  
薔薇の騎士分隊。隊長は勿論あの人。

「薔薇の騎士と言えば同盟の最強部隊ではないか。その連隊長から指導を受けるなどはあの二人には少々ハードではないか？」

「いや、シエーンコップもそれはしっかり考えている筈だから心配は無用なだけだ・・・」

ヤンが心配しているのはまだいたいけなエリオとキャロがシエーンコップに変なことを仕込まれないかであった。

「まさか、そのようなことはないだろう」

「あるから言っているんだよ。シエーンコップならエリオ君あたりに『女性の正しい抱きかた』とか教えかねない・・・」

そんな話をしているとシエーンコップが入り口の前を通りすぎよ

うとした。

訓練が終わったからシャワーでも浴びにいかうとしていたのだろう。

「あっ！ヤン提督！どうしたんです、カイザーなんかと一緒に？」

「シェーンコップ、今日の訓練で何を教えた？」

彼曰く、今日は護身術や陸戦基礎を教えたらしい。

護身術、というのが気になったが、そこには触れずに先程話題となった質問をシェーンコップにぶつけた。

「はっはっは！私はそんなこと教えてませんよ」

彼は完成度の高いジョークを聞いたかのように笑った。

それを見てヤンとラインハルトは頬を緩めたが、そこでシェーンコップは急に真顔になり言った。

「私がモンディアルに教えたのは『処女の正しい抱き方』ですよ」

はやてのもとに地上本部より入電の知らせが入った。

繋ぐように指示を出して一呼吸置くと目の前に画面が出現し、そこに一人の老人が映った。

『久しぶりじゃのお八神よ。エ？』

「ビュコック中将もお元気そうぞ」

ビュコック中将はレジアス中将に並ぶ地上本部の重要人物である。聞いた話によるとなん十年も前にミッドに漂流してきてそこから叩き上げで中将の地位まで上り詰めた強者だという。

『今回連絡したのはそっちの部隊に任務をやるうかと思つてな』

ビュコック中将から告げられた任務はホテルアグスタで行われる骨董美術品のオークションの警備であった。

『こつというのは禁止物の違法取引の隠れ蓑にもなるし、出展されている品の中には一応ロストログアもあるらしい。正式な命令書は後日そっちにおくるぞ』

「了解しました。慎んで拝命いたします」

はやては消えかけたモニターに敬礼をしてみせた。

嵐の足音は着実に近づいてきていた。  
だが、それを関知しているものは少なかつたのだ。

続く

月@日

シェーンコップ三佐はエースに数えられる魔導師の一人らしいから  
そのような人の教導を受けれるのは嬉しかった。

でも、流石にハードで、魔法の訓練は殆どやらなかつた。

きつと護身術の訓練を本格的にやっている部隊とかここだけじゃ  
ないだろうか。

そう言えばシグナム副隊長も護身術訓練でシェーンコップ隊長に  
負けてたなあ。

「やつは数々の死線を潜り抜けてきたに違いない。やつは何十人、  
いや、何百人と殺している！」

シグナム副隊長はそういつていたけど僕はシェーンコップさんが  
それほど殺しているようには見えなかつた。

あと、今日の終わり間近に八神部隊長が来て少しだけ護身術訓練  
を受けてたけど失礼ながらスツゴく弱くて、キャロにも負けてた。

人間、どこかで優れてるところかで平均より劣ると聞いたことがあ  
るけど、本当だとわかつた。

少なくとも、今回のことで八神部隊長は人間であると証明された  
わけだ。

そう言えば、最後に隊長から『正しい賞状の抱き方』について聞  
かされたけど、どう言うことなんだろう？

## 新部隊（後書き）

本編では触れませんでした。ラインハルトは囑託魔導師としてキルヒアイズと共に行動することになりました。

部隊としては完成してないので仲間集めをずるそうです。

ラインハルト、警備任務につく（前書き）

アニメとはセリフとか大分違うかもなの。

## ラインハルト、警備任務につく

首都クラナガン郊外の小さな住宅街。

住宅街と言っても民家とちよつとした商店が申し訳程度に無秩序に並んでいるだけである。

しかし、人はすんでおり、近くに管理局の部隊駐屯地があるためそれなりの賑わいはあった。

そのような場所を二人の人間が歩いていた。

一人は少なくとも成人男性で、もう一人は10代前半とおぼしき男の子である。

このような曖昧な説明しか出来ないのはこの二人が厚手のローブをはおり頭をフードで外界から隔離するように深く被っているからだ。

二人はこの住宅街に用があるわけではない。今ここを歩いているのは目的地への過程でしかないのだ。

そして、その足の向かう先は二人以外にわかるはずがなかった。

「今まで謎やったガジェットドローンの製作者やけど、最近の調査で広域指名手配犯のジェイル・スカリエッティだとわかった」

ミッドチルダ上空ヘリ内部。ここでは今はやてが調査の結果と今回の任務について説明中だった。

「今回の任務はホテルアグスタで開催される骨董美術品のオークション警備、人員警護で、スターズ分隊はここ、ローゼンリッター薔薇の騎士分隊はここを警備してもらう。このオークションではけっこうなロストロギアも出展されるようやから、それに反応してガジェットが来るかもしれへんしな」

簡易見取り図を指差して説明していくはやてにキルヒアイスが質問をした。

「私たちは、何処にいればよいのでしょうか？」



「キルヒアイスさんとラインハルトさんは私たちと内部警備するの  
ラインハルトとキルヒアイスがなのはから説明を受けている時、  
奥に座っていたキャラコがシャマルに先から気になっていたことを聞  
いた。」

「あの、この箱って何が入ってるんですか？」

彼女の指差す先には5つの箱があった。

「隊長たちと、あそこの二人の仕事服よ」

そう言うとシャマルは意味ありげにふふつと笑った。

ホテルアグスタ

ここのオークションはネットオークションとは違い選ばれた者だ  
けが参加を許される気品の高いイベントである。

そこを訪れていた一人の若い男性は美しい女性三人組を見つけた。

「お嬢様方？どうです？私とお茶でも・・・」

何の捻りもない文句だったが、女性はニコリと笑った。

「すみません、私たち今仕事中的なもので・・・」

女性の手には管理局員の身分証明証があった。

そんな美しい隊長達に負けじと注目を浴びていたのがラインハル  
トとキルヒアイスだ。

天使のような容姿に漆黒の礼服をはおり、アイスハルト蒼氷色の瞳をもつライン  
ハルトは高貴なる淑女の心を鷲掴みにしており、男性からは羨望と  
嫉妬の眼差しを受けていた。

キルヒアイスも十分以上の容姿だが、ラインハルトと共にいるとど  
うも陰に入るのだ。もっとも、キルヒアイスはそのようなことは微  
塵も気にしていなかったが。

「キルヒアイス、このような所を見ていると門閥貴族の吹き溜まり  
を思い出すな」

「はい、しかしラインハルトさま、ここにいるのは貴族等ではなく  
金がある市民ですよ」

例外もいるでしょうが、とは言わなかった。

「それもそうだな。・・・ん？」

巡回を続けていると通路の向こうで我らが部隊長殿と緑の髪をもつ紳士が談笑しているのが見えた。

「キルヒアイス、八神部隊長はこのような所の人物とは縁がないと思っていたがな。なかなか侮れん」

この発言はいささか失礼に値するが、事実、はやてが交流を深めていそうなのは社交界よりも近所付き合いというイメージがあるのである。

「彼も管理局の人間ですよ。アコーズ査察官です」

そうか、と答えながらもその男が査察官であることを疑うラインハルトであった。

「あ、ラインハルトさんにキルヒアイスさん」

振り向くと、なのはとフェイトがこちらへ歩いてくるのが見えた。

「どうですか？ なにか変なところとかありましたか」

「いや、特に。この階は」

ラインハルトがそう言うとなのはから一階玄関の警備をするように言われた。

「このようになにか命じられるのは久しぶりだな」

一階に向かう途中、ラインハルトはキルヒアイスにそう言った。

ホテルアグスタ外

『はあー、すごいなー今日は八神部隊長の守護騎士全員集合だよ』

念話でスバルが感嘆の思念を飛ばしてきた。

『あんだ隊長陣についてやけに詳しいわよね』

それに対してティアナは返事の思念を飛ばす。

スバルにとってここの隊長陣は憧れの存在である。詳しくて当然といえば当然だが。

それにしても、とティアナは思う。

この部隊 機動6課の戦力は異常である。

本来管理局の行使部隊は保有戦力が限定されており、総合的な魔

力値を越えた部隊編成は禁止なのだ。

これはその部隊が反乱行動に出た際に対応できるようにとの配慮である。

しかしこの部隊はどうだ。

次元世界のありとあらゆる魔物を集めたような編成ではないか。

隊長はさておき副隊長までSランクに近い。あの年で既にBランクのエリオにレアな竜召喚師のキャロのコンビはかなり強力。潜在能力の塊とも言えるスバル。隊長陣に届くほど強いラインハルト、キルヒアイス。ランクはびっくりするほど高いわけではないが技術なら部隊一のシェーンコップ。

この中で凡人は私だけ。

強がっているティアナだが、この部隊だと存在自体が彼女にとってコンプレックスなのだ。

しかし、こんなことで挫けてはいけない。私は、もっと進まなきゃいけないんだ。

この焦りがいかに危険性をはらんだものなのかは彼女にはわからなかった。

ラインハルト、警備任務につく（後書き）

今回は機動6課日記は無しです。

ラインハルト、警備任務 part 2 (前書き)

なんか長丁場の予感んんん!

## ラインハルト、警備任務 part 2

シヤマルの指輪型デバイス「クリアールヴィント」が輝いた。

「センサーに反応？ ロングアーチ、なにか分かる？」

「来た来た、来ましたよー、ガジェットドローン陸戦？ 型！」

それを皮切りに矢次に報告が入る。

『一型、数は30ないしは35』

『？型もいます！ 数は4！』

『二型も捕捉。数は40ないしは43。全て三方向から接近中！』

シヤマルの方に画像が転送されてきた。

ガジェットの大群は三隊に分かれホテルを方位するように展開していた。

「こちらシヤマル！ ガジェット襲来のため私が指揮を執ります！」

こう言うと各メンバーから威勢のいい返事が来たが、本人は不安だった。

（どうしよう・・・包囲されつつある。こんなのヤンさんはやめちゃんしか打開無理よ・・・）

彼女がラインハルトの指揮官としての天性の才能を知っていればこれほど悩まなかったろう。

しかし、その事を知らない彼女は臨時指揮官として館内の誘導が終わりもつとも信頼できる上司が来るまで最善の手を打たなければならぬのだ。

取り合えず彼女は各隊にそれぞれを対応させることにした。

「敵をホテルに近付けるな、か」

「どうされますか、ラインハルトさま」

キルヒアイスの質問は「この命令に従うか否か」というものである。

ラインハルトはそれを否定した。

「いや、お前はともかく、俺はただか三尉待遇の協力者にしか過ぎない」

そう言うとラインハルトはミニ艦隊を出現させた。

「命令には従うまでだ」

「各隊で防衛線を張るように、だそうですね」

エリオにそう言われたシェーンコップは「そうか」と答えて少し考えた。

そして顔を上げてエリオとキャロに指示を出した。

「二人はフリードで上に上がって？型の相手をしろ」

「えっ、シェーンコップ隊長!？」

キャロが心配した。

？型は防御力が低く直線的なため相手しやすいが、動きが複雑で頑丈な陸戦型の大群、しかも？型までいるのに一人で立ち向かうなど自殺行為だ。

そんな気持ちを知ってか知らずかシェーンコップは同盟軍の装甲服に酷似しているバリアジャケットを着こみ、右手にトマホークを持ちながらさらっと言った。

「俺はこんなことで死ぬほど悪いことはしてないんでね」

命令を受けたスバルとティアナは戦闘態勢をとっていた。

「よし！行くよ！ティア！」

「うっさいスバル！落ち着きなさい！」

しかし、一番落ち着いていなかったのは他の誰でもない、ティアナだった。

彼女の精神を自己嫌悪と責任、コンプレックスの重圧が圧迫しており更に大きな焦りを生んでいるのだ。

(落ち着きなさいティアナ・ランスター！)

言い聞かせるも焦りは募る・・・

その時、上空を光が貫いた。

「よし、新人どもの所へはいかせねーぞ！」

「お前も以外と過保護だな」

「うっさい！」

前線の援護のためにヴィータとシグナムが飛来した。

しかし、三方向から接近する敵にたいして有効な手を打てないでいるようだ。

「くっそ・・・」

しかし、それはティアナから見れば憧れ、そして軽い嫉妬心の対象となっていた。

そんなとき、近郊の森の中、一人の男と数十センチの融合機が10歳前後の少女を見守っていた。

その少女の足元には魔法陣が展開されている。

「吾は乞う」

呪文を唱えていくと周りに多くの虫が現れ、彼女が指を差し出すとその先に止まった。

「ミツシヨン、オブジェクトコントロール」

そして、虫に優しく語りかける。

「気を付けてね、行ってらっしゃい」

屋上で指揮を執っていたシヤマルは敵の動きが変わったことに気がついた。

「有人操作になったのかしら。あつ！はやてちゃん！」

屋上に誘導が一段落ついたはやてが現れた。まだドレス姿である。

「どうや？敵さんの様子は？」

「うん、さっきまでいつもの規則的な動きだったのに急に良くなつて・・・」

「それはよかった」

シヤマルは一瞬耳を疑った。今この人はよかったと言ったのだ。それを見てはやてがもう一度言う。



「だから、有人操作になってよかったちゅうんや。まあ、見とき  
はやては戦力分布を確認して各隊に指示をとばした。」

続く

日記

○月 日

今日の訓練中にいきなりシェーンコップ隊長が僕たちに昔手下が  
言っていたという世界最強の言葉を教えてもらった。

使う機会があれば使いたいけど使える相手がないから暫くはお  
蔵入りだ。

ラインハルト、警備任務 part 2 (後書き)

次回、包囲されつつある機動6課。それを打開するはやての策とは？そして前話の二人組はいつたい！？

次回でアグスタタイム終了の予定です。

都合上話を大幅変更しました。ごめんなさい。

ラインハルト、警備任務 part 3 (前書き)

まだ終わらないよ

## ラインハルト、警備任務 part 3

ミッドチルダ某所

そこには白衣を着た男性と助手らしき女性が一人いた。

『・・・ドクター』

「ン？ルーテシア、どうしたんだい浮かない顔をして？」

男は白衣を翻し、モニターに映る少女に体を向けた。

『新しくガジエットを寄越してほしいの』

「ンンン？ルーテシアにしては珍しいね、なにかあったのかい？」

『敵が予想以上に手強くて。このままじゃドクターのお願い事きけないから』

男は「そうか」と言いなにかを考えるような素振りを見せたあと再び少女の方を見た。

「よし、ガジエットを？型を三機、？型十五機用意しよう。でも、これが限界だからね」

『ありがとう、ドクター』

少女は礼をいうと画面ごと消えた。

そして間をおくと男はクククと笑いを漏らした。

「ドクター？」

女の問いに男は優しく答える。

「いや、彼女の能力は実に素晴らしい」

「極小の召喚虫による無機物遠隔操作『シユテーネ・ゲネゲン』・・・  
ですね」

ドクターと呼ばれた男は満足そうに頷き言葉を続ける。

「もつとも」

「？」

「これもルーテシアの能力の一端にしか過ぎないがね」

ホテルアグスタ

『ロゼンリッター』  
薔薇の騎士分隊

「！？転送魔法、来ます！」

ロングアーチと通信が途絶した今、薔薇の騎士分隊の情報源はキヤロとなる。

「どんな規模だ」

「？型が三機、？型が十五機、やはり三隊に別れてますね」

しかし、シエーンコップはそんなものか、とでも言うように不機嫌な顔をして見せた。

その時、臨時指令所から通信が入った。

ラインハルトは艦隊を展開しガジェットと対抗していたが、やはり苦戦を強いられていた。

「キルヒアイス、そっちはどうだ！」

ちらと見ると丁度キルヒアイスはガジェットを一機撃墜したところで、息を一つ吐くとラインハルトに微笑んだ。

「やはり、AMF が厄介ですね」

このまま真正面からやりあっても勝てないとラインハルトは悟った。

いくら魔力が安定しているからといっても所詮は初心者である。

まだまだ経験不足が目立った。

しかし、その時。

『こちら臨時指令所。今から作戦行動に映るから、言うこと聞いてな』

少女はガジェットの操作をしながら敵が後退をはじめたことに気づいた。

後退してくれるのは有難い。

その分ガリユーのサポートにも回せる。

そう判断した彼女はガジェットに分散の命令を出した。

が、しかし。その瞬間、後退中だった敵が急に攻勢となったのである。

彼女は急いで先の命令を取り消すが、そうすると再び後退を始めるのだ。まるで嘲笑うかのように。

非常にウザかった。しかし無視することもできない。

「先に邪魔なやつからやつつけてこい」

彼女は再びガジェットに命令を飛ばした。

臨時指令所

空中に浮かぶ地図の上を移動する光点を見てはやてはニヤリと笑った。

彼女がニヤリと笑う時は必ず変なことを思い付いたときか、物事が上手く運んだ時の二つである。

今回は確実に後者であるだろう。

彼女はキルヒアイスに念話で話し掛ける。

「キルヒアイスさん、準備はええか？」

「こちらはできてます」

返事を聞き、よし、と彼女は指令を飛ばす。

「予定通り敵を目標地点に誘導したら一目散で逃げるんや。ええな、一目散で、やからな」

そして、敵が目標地点についた。

包囲するような体形だった陣形が今では見る影もなく崩れ、一ヶ所に集まっていた。

目標地点に到着した瞬間に先程まで後退戦をしていたフォワード陣は正に脱兎のごとく背中を向け逃げ出した。

ガジェットはとつさに反応する。が、そのときにはもう遅かった。キルヒアイスは空中からガジェットの密集する地点へ一発の魔力弾を撃ち込んだ。

すると、その魔力弾が着弾する寸前にそこを強烈な光が包んだ。

その輝きは爆発的なエネルギーを放出しながらガジェットの身体を焼き、引き裂いていく。

そして、光が消えるとそこにはがらくたの山と化したガジェット

達の亡骸が無数に横たわっている非生産的な光景が広がった。

物陰に身体を隠していたフォワード陣はラインハルトとシェーン  
コップ以外、目をぱちくりさせていた。

「ラインハルトさま、お怪我は？」

「いや、無い。それよりキルヒアイス、さっきのはなんだ？」

「指向性の高濃度圧縮魔力粒子です。ぼくは指向性ゼツフル粒子と  
よんでいます」

「ふうん、魔法なのか？」

「そんなところですよ。特定の人物の魔法で起爆します」

ラインハルトは再びふうんと返事した。

丁度その時通信が入る。

『ほらほら、みんな。まだガジェットは少し残っとるよ』

ガジェットを操っていた少女のいた森から反対の位置にある森に  
厚手のコートを羽織った男と子供が立っていた。

「どうだ？」

「間違いありません」

男の質問に子供はいまいち子供らしくない冷たい口調で返事した。

「我が皇帝閣下はここにおわす」  
マイン・カイザー

「そっか」

男はホテルの方を懐かしむような目で見つめた。

その男の瞳は左右で色が違うのが印象的であった。

続く

### 機動6課日記

昨日は久し振りにフェイトさんとキャロ、僕の三人で夕食を食べ  
た。

フェイトさんの手料理はシェーンコップ隊長の“男の手料理”よ  
り遙かにおいしかったことは胸を張って言える。

でも、フエイトさんが僕たちの話を聞いて心配そうにしていたのはなんでも。



ラインハルト、警備任務 part 3 (後書き)

フエイトさん家の夕食風景はまたいつかかきます。

コートの二人組、一人はわかったと思いますが、もう一人は「ええ!？」だと思います。勘のいい人ならわかったかもしれませんが。警備任務は次回で完結するはずです。

ラインハルト、警備任務 *final* (前書き)

あの二人の正体は？

## ラインハルト、警備任務 final

残った敵機は？型が十数体だけだった。

本当のところはまとめて一網打尽にしたかったのだが、致し方あるまい。

命令を受け、まず動いたのがティアナだった。

「さっきの作戦で自分はなにもできなかった・・・」

彼女はそう思っていたが、実際は敵を丁度良い距離で惹き付けたある意味いちばん活躍していた人物である。

しかし、今彼女が欲しているのは部隊としての戦果ではなく個人レベルでの戦果だった。

「次はもつと、いや、残り全部私が落とす・・・！」

彼女は貪欲な出世欲があるわけではない。名誉が欲しいわけではない。

このまま自分の居場所がなくなり皆に置いていかれるのが辛いのだ。

「ランスターか！？先行しすぎだ！」

しかしラインハルトはそれを言葉にはしなかった。どうやら周りも困惑しているようだ。

「ティア！」

そのようななか、スバルがティアナを追うかたちで駆け出した。

最早あきれて言葉もでない。

指揮官の指示がなくてもある程度の秩序が守られなければならないのは当たり前のことだ。

「所詮はまだまだ烏合の衆というわけか」

ラインハルトの評価は厳しいものだったが、自分もその烏合の衆を構成する一人だということを思い出して小さくため息をついた。

「どうしますか、助けにいきますか？」

キルヒアイスが尋ねてきた　いや、キルヒアイスはこの状況に  
ラインハルトがどう動くかは大方予想がついているだろう。

「助けにいくさ。見殺しにもできんしな」

ラインハルトは華麗な動作で艦隊を出現させた。

『ティアナ！戻るんや！』

「掃討戦なら個人でもやれます！行きます！」

『ティアナあ！』

通信のはやての声には怒気が滲んでいたが、気にしなかった。

「私だつて　隊長達のように特別な力がなくなつたつて　ランスター  
の弾丸に貫けないものはないんだ」

彼女は独り言のように呟くと通信を切った。

生き残りのガジェットの殆どがこの先にいる。そしてそれらは彼女  
の視界に入ってきた。

隣にいるスバルに呼び掛ける。

「スバル！クロスシフトA　、いくわよッ！」

「おう！」

威勢の良い返事と共にスバルはウイングロードで駆け出した。

そしてティアナはカートリッジを4発ロードし、いつもよりも多  
くの魔力弾を出現させた。

「ティア！四発ロードなんて無茶だよ！」

ティアナは大丈夫と答えた。しかし、いつもよりも多くの負担が  
身体にのし掛かる。

「よし、いける・・・」

このコンビネーションはたくさん練習してきた。失敗は無い！

「クロスファイアー、シユートツ！」

号令と共に幾つもの魔力弾がガジェットに向けて放たれ、それら  
は的確に金属の肌を貫いていった。

だが、今までに無いほどの数の魔力弾を操るのは半人前の彼女に  
はまだ難しく、コントロールから弾が一発外れてしまった。

しかも、それはスバルのところへ一直線に飛んで行く。

「しまった!？」

今は対ガジェット戦のため非殺傷設定ははずしてある。当たればただではすまない。

ティアナも、スバルも、そして駆け付けたラインハルトとキルヒアイスも息をのんだ。

しかし、誰もが予想した最悪の事態は怒らなかった。

ティアナの魔力弾が着弾する寸前に森から別の魔力弾が飛び出し、ティアナの物を撃墜したのだ。

ラインハルトが弾の飛び出した方向を向くと、そこには厚手のコートを羽織った男がひとりと同じく厚手のコートを羽織った子供が一人ずつ立っていた。

ガジェットの掃討が終わり、後は撤退を待つだけだった。

ティアナとスバルはヴィータに引きずられるようにして臨時指令所につれてこられた。

そこにいたのはなのはとシェーンコップ、はやてだった。

何を言われるかは分かっていた。

全員（シェーンコップは微妙だが）怒りと悲しみが織り混ぜられた表情をしている。

彼女を引っ張ってきたヴィータは怒り心頭だった。殴られなかったのは殴ったりするのは止めるようにはやてに厳命されているからだろう。

「ティアナ」

まず始めに口を開いたのははやてだった。

「自分が何を言われているか、わかっとなるな？」

「はい……」

ティアナの声は口に靄がかかったように小さく弱々しかったが、はやては続ける。

「命令違反に危険行為。その一つ一つが部隊そのものを壊滅させう

「することも、わかるな？」

「はい……」

「あの、あれはコンビネーションの一環で」

「スバル、黙ってなさい」

スバルの弁護はなのによって封じ込まれた。

はやては一つため息をついた。

「ティアナ・ランスター二等陸士、スバル・ナカジマ二等陸士。両名に三日間の訓練参加停止と反省文一日三枚書くことを命じる」

「どうだったなのは？二人の様子は」

なのはが振り向くと執務官の黒い制服に身を包んだフェイトが立っていた。

「大分反省してるみたい。フェイトちゃんは？あの二人のこと、何かわかった？」

「全然。しきりに『マイン・カイザー』って言ってる。ラインハルトさんと呼んではわかったんだけど」

「ということはラインハルトの知り合い、つまるところラインハルトのいた世界の住人なのだろう。」

「わかった。ちょっとラインハルトさん呼んでくるね」

なのはは事後処理にあたっているラインハルトのところへ走り出した。

その男がいる場所はホテルの一室だった。

ラインハルトとキルヒアイスは扉をノックする。すると中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

ドアノブを捻り中に入る。

「……やはり卿か。ロイエンタール」

「お久しぶりです、ラインハルト・フォン・ローエングラム陛下」

ロイエンタールは恭しく頭を下げた。

「陛下はよせロイエンタール。今の俺はただかだか三尉。キルヒアイスより低い」

ロイエンタールはキルヒアイスを昔を懐かしむような目で見た。

「キルヒアイス閣下は、何も変わっていないように見える・・・」

キルヒアイスはラインハルトからロイエンタールの反乱については聞いていた。しかし、ロイエンタールがラインハルトを裏切ったわけではないことはキルヒアイスにもわかった。

きつとラインハルトも同じだろう。

「それよりもロイエンタール、なんだ、卿はまた子供を・・・罪な男だな」

その子供とはロイエンタールの横に座っている十歳程の男の子のことである。

「いえ、こいつは私の子供ではございません」

ラインハルトとキルヒアイスが頭の上に「？」の文字を浮かべると少年はすぐと立ち上がってこちらを見た。

確かにロイエンタールには似ていない。いや、似ていないということかどこかで見たとある顔つきだ。

「陛下、貴方は忠臣の顔も覚えられないような方でしたか」

「なに？」

次の瞬間、少年の瞳が不気味に光った。

「！？オーベルシュタイン！？オーベルシュタインか!？」

「左様です」

流石にこれには驚いた。オーベルシュタインはここに来たときおよそ十歳の子供になっていたのだ。

可愛げがないようだが、よくよく見てみると若々しい肌はみずみずしく、頬にはほんのりと赤みをさしていた。

実に可愛らしい子供だ。女性なら母性本能が沸き上がるだろうがラインハルトとキルヒアイスには笑いの感情が沸き上がってきた。

笑いをこらえるラインハルトとキルヒアイスの心情を知ってか知らずかオーベルシュタインは小さくため息を吐き子供らしい声で言

った。

「陛下が私を見て直ぐに気づかないとは、実に悲しいことですぞ」

「ふん、鉄面皮が哀しみを語るとは、笑止」

「なにか言いましたかなロイエンタール元帥」

「気にするな。只の本音だ」

オーベルシュタインはラインハルトに向き直った。

「陛下、私たち二人を部下としてお使いください。ロイエンタール元帥・・・今は違いますが、彼の戦闘力と私の情報操作魔法の力必ずしや、陛下のお力になることでしょう」

オーベルシュタインは口調はお願いだが、本質的には「我々を使わないといういる苦労しますぞ」といつていることだろう。

「わかった。俺も仲間は欲しいし、断る理由もないからな」

こうしてロイエンタールとオーベルシュタインが仲間になった。クラナガンの陽は傾き始めていた。

続く

今回は日記はおやすみです。

時空の歴史がまた1ページ・・・



ラインハルト、警備任務 *final* (後書き)

大分話を変えてますが、気にしないでください。  
基本的にはなぞります。

願い、二人で 前編（前書き）

遅れました。忙しくて・・・（汗）

## 願い、二人で 前編

クラナガン某所

少女と白衣を着た男が通信で話している。

『 ということで、ありがとうルーテシア。 また』

「うん、ドクターも元気で」

通信を切ると、画面のあった場所には小さな少女が不機嫌そうな顔でぶかぶか浮かんでいた。

「ルールー、あんな変態と付き合うなよ」

少女 ルーテシア・アルピーノは首を振る。

「ゼストもアギトもドクターを嫌ってるけど、私は別に嫌いじゃないから。それにね・・・」

そこまで言うと、ルーテシアの隣に忍者を彷彿させる彼女の召喚虫、ガリユーが現れ、右手に持つアタッシュケースを開けて見せた。  
「・・・また違った」  
「・・・」

ルーテシアは一瞬落胆したようだったが、直ぐにアギトへ視線を戻した。

「私が欲しいものを見つけるにはドクターの力が要るから」

そのときルーテシアがどのような表情を見せていたのかは逆光で読み取れなかった。

機動6課隊舎

「みんなお疲れさま！」

玄関前でフォワードメンバーが隊長からこの後の動きについて説明を受けていた。

「今日の午後訓練は無しね」

「お風呂でも入って、御飯食べて早めに休んでね」

なのはも、フェイトもティアナとスバルについては触れなかった。

ある種の優しさなのだろうが、それが余計にティアナの心を抉る。

「薔薇の騎士メンバーは俺の料理でも」

「結構です」

振られたシェーンコップは「何が気に入らないのかな」などとぶつくさ文句を言いながら去っていった。

「スバル、あんた先戻ってて。私個人練習してるから」

ティアナが言ったことに乗らないスバルではない。

「あ！私も、私もー！」

「僕も！」

「私も！」

しかし、ティアナはそれを断った。

「エリオにキヤロは明日も訓練あるでしょ。隊長達が出たように、早く休みなさい」

「ティア、わたしも停止処分中だよ」

しかしティアナはNOと答えた。

「私一人でやらせて・・・」

隊舎にはいくつかの応接間がある。

その内の一つにラインハルト、ロイエンタール、オーベルシュタインがコーヒーを前にして座っている。

そこへ一人の男性が入室してきた。

「はじめまして。グリフィス・ロウランです」

ラインハルトにとってグリフィスは「目立たないが堅実で信頼と尊敬に値する人物」である。

「八神部隊長は？」

「公務で手が離せないの・・・」

そう言ってグリフィスは三人に対となる席に腰をおろした。

「さて、ロイエンタールさんと、オーベルシュタイン・・・くん？」

その言い方にオーベルシュタインはいささか不満げだったが殆ど

面に出さなかった。しかし、ロイエンタールは見破っており、少し愉快そうだった。

「貴殿方はどういった経緯でここへ？」

二人は（基本的に）正確に嘘をつかずに話した。

ラインハルトはここにオーベルシュタインがいるのを不思議に思っており、その事を話すとフツと笑ってから言った。

「それは皇妃陛下が陛・・・ラインハルトさんに要らぬ心配をさせないようにするための嘘でしょう」

ラインハルトはなるほどと頷いた。

「つまり、お二方はラインハルトさんの友人であったと言うことですか？」

「まあ、そういったところだ」

ロイエンタールがそう答えるとグリフィスはそうですか、言ってみて挨拶をして応接間から出ていった。

暫く静寂が室内を包みこみ、それをロイエンタールが破ってラインハルトに謝罪した。

「陛下、先程は失礼を・・・」

「構わん。というか、陛下は止める。今は三尉待遇の一個人にしか過ぎん」

「そうですねロイエンタールさん。ラインハルトさんはこの世界において皇帝としてではなく一人の青年として存在しておられるのです。ここはラインハルトさんの邪魔にならないように言葉使いに十二分注意して行動すべきだと考えますが」

「餓鬼がキーキー音を立てるな。卿の出す音は不快指数がいささか高いのでな」

「・・・何か言いましたかな」

「案ずるな、只の悪口だ」

ラインハルトはこの二人のやり取りを見て思う。

この二人、実は仲が良いのではないか？

日は完全に姿を消しても、ティアナは一人で自主練に励んでいた。空中に浮かべたスフィアに銃口を向けていく。単純だが、効果的な練習方法だ。

「フツ・・・フツ・・・」

彼女が銃口を動かす度に高い音がなる。正確に狙いを定めている証拠だ。

そこへいきなり人影が現れた。

「・・・誰です」

動きを止めないで暗闇の人物に誰何した。

「私だよ」

「ヤンさん・・・」

そこにいたのはヤン・ウエンリーだった。

「休憩無しで四時間、体壊すよ」

「いいんです。私、凡人なもので」

ヤンはおさまりの悪い頭を掻きながら「凡人ねえ」と吐息を吐いた。

「私から見ればティアナもすごいんだがね」

「・・・」

ヤンはまた髪を掻き回す。

「とにかく、少しは休みなさい」

しかしティアナは曖昧な返事を返すだけだった。

数日後・・・

高町なのはとジークフリード・キルヒアイスは戦技教導官である。だから後日の訓練スケジュールをたてなければならなかった。

その為には事務室のオフィスのコンピューターを使う必要があり、二人はそこへ向かっていた。

そんな二人のところへ一人の幼女・・・いや、ヴィータが話しかけてきた。

彼女はなのはの補佐官であるため訓練の時に感じたことや任務中

の部下の雰囲気や技術について報告する義務があった。

「なのは、キルヒアイス。ちょっといいか？」

そう言われ、なのはとキルヒアイスは談話室に入る。

「最近のティアナ、なんか変じゃないか？」

「変？」

なのはとキルヒアイスは同時に聞き返し、考えた。

「確かに、最近のティアナは焦ってる感があるよね」

「だろ？ホテルでの一件より前はあまり感じなかったけど、あの子はおかしかった」

ヴィータは紙コップのスポードリンクを一息に飲み干し続けた。  
「ウェンリーから聞いたんだけどさ、参加禁止処分受けてからティアナろくに寝ないで自主練してんだぜ」

その事はなのはもヤンから聞いていた。

彼女の焦りの原因はなにか。

その時、キルヒアイスに思い当たる節があった。

キルヒアイスはおもむろにキーボードを操作した。

空中に一人の青年の顔が写し出される。

「彼はティード・ランスター。察しの通りティアナの実兄です」

その頃、同じことを大浴場でスバルがキャロに話していた。

「ティアのお兄さんは首都防空隊のとっても優秀な魔導師で、なのはさんより2年早く尉官になった人なの」

幼いティアナにとっては彼は自慢の兄であり、また目標であった。しかし、機動6課とは違い、首都防空隊には老若男女、ピンからキリまで様々な人々がいる。そのような場所で彼の功績を素直に喜ぶ人間など皆無だった。

同期には遠ざけられ、歳上の部下からは嫉妬と羨望の眼差しで見られ、上司には疎まれていた。

話の流れが重くなると壁のスクリーンに代わる代わる写し出される風景が雨模様となり、キャロにスバルの話とスクリーンが同調しているのではないかと錯覚させた。

「ティアナはね、気づいてたんだって。お兄さんが、ちょっと変なこと」

家に帰ってくるといつも疲れた顔をしており、その疲れは日に日に増していった感じらしい。嘗てのように優しく魔法を教えにくれたり楽しい物語を聞かせてくれることもなくなった。

いつも部屋で魔法の勉強。

そのような兄の窺れた背中を見てティアナにできたことはその兄が振り向いてまた彼女を抱き上げてくれることを願うだけだったが、その機会は永久に訪れなかった。

日頃の精神的ストレスが原因でうまく立ち回れず任務中に犯人に撃墜され殉死したのだ。

彼の葬儀は一部の者だけでひっそりと行われた。

「その時、お兄さんの上司もそれに参加したらしいんだけど」

幼いティアナは聞いてしまった。その上司が部下に話していたことを……。

「奴は本当に役立たずだったな。死んでも捕まえるべき犯人を取り逃がすとは。航空隊の恥だ」

ティアナはその時思った。

私の兄はそんな役立たずだったか。死んでなお貶されるような人間だったか。

その思い出が今の彼女を縛っている。

それは時として強さとなり、時として自分を滅ぼすものとなる。

そしてまさに今、ティアナ・ランスターは見棄てられたくないという思いから身を滅ぼそうとしているのだ……。

続く

日記

月\*日 たまにヤンさんがわからなくなる。

前の世界では階級は中尉だったらしいけど、イマイチ怪しい。



シェーンコップ隊長はなにか知ってるみたいだけど・・・

オマケ

ラインハルト・フォン・ローエングラムは病に屈していた。

本人は別に屈していた訳ではないと言っているが、医者がそういうのだから真実だろう。

帝国艦隊旗艦ブリュンヒルト。その白い貴婦人の一室に彼はいる。大きな窓からは眩い星が漆黒の海に浮かんでいるのが見えた。

彼は赤毛の友とこの海を手に入れようと誓い合ったのである。

そして、ラインハルトはそれを成し遂げた。が、それを分かち合う赤毛の友はもういない。

しかし、彼の乾いた心を少しでも潤そうとする少年がいた。

名はエミール。従卒であり、皇帝の主治医なや成るべく日々勤勉にくれる少年である。

そんな彼が、ラインハルトのもとを訪ねた。

「陛下」

「どつしたエミール？」

エミール少年は息をひとつ吸い、続けた。

「実はですね、夢に無目藻とか言う不景気な面をした男が現れまして、リリカルキャラに銀英伝キャラを当てはめらどうなるか、というのを陛下に伝えると・・・」

「まてまてまて、エミール」

豪華な金髪をなびかせながら起き上がったラインハルトはエミール少年を一度制止して、言葉を紡いだ。

「・・・あんなしんみりした始まりかたで結局ネタか？」

「はい」

又も室内を沈黙が支配した。それを打ち破ったのはエミールだった。

「僭越ながら、僕に考えがあります」

「ほお、言ってみる」

「では……」

エミールは軽くゴホンと言って話始めた。

「読者の皆様にアンケートを取るのです」

「……正気か？」

「はい」

「アンケートなど、読者の皆様がほいほい答えるてくれるものではないぞ！？誰も答えなかつたらどうする！？」

「そのときは、作者が独自の考えと偏見に基づき決定します」

ラインハルトはフムと考え、答えた。

「まあ、良いだろう」

というわけで青二才の作者がおそらくもアンケートなるものを  
実施いたします。まず、主役三人娘を銀英伝キャラにするなら誰を  
誰にしますか？

例\*クロノ・ハラウン<sup>II</sup>アレックス・キャゼルヌ  
みたいな感じで。

\*高町なのは

\*フェイト・T ・ハラウン

\*八神はやて

願い、二人で 前編（後書き）

アンケート、答えてくれると嬉しいです。わからなかったら質問してください。

次回、伝説の冥シーン

願い、二人で 後編（前書き）

冥シーンです。

## 願い、二人で 後編

「ほーら、ティアナ、起きて！」

目覚まし時計の音とスバルの声の御世辞にも上等とは言えないコースによつてティアナは目覚めた。

「むう、ゴメン、今起きた」

巣穴から這い出す熊を連想させるティアナは寝ぼけ眼で目覚まし時計を見た。

4時丁度。窓から差し込んでくる柔らかな光がそれが夕方の4時でないことを無言で教えてくれる。

背伸びをしてスバルの方を見ると、既にトレーニング用のジャージに着替えていた。

「て、なんでアンタまで！」

「だって、今日は久しぶりの模擬戦でしょ。しっかり練習しなきゃ」  
そう、ついに二人の訓練参加禁止処分が解けたのだ。

若い鋭気をもて余していた二人はヤル気満々である。

「はあ。それなら、エリオとキャラにはだいたい遅れてるからね。スバル、アンタ足手まといにならないでよね」

「わかつてるよう」

そうしてひとしきり笑いあうと二人とも着替えは終わっていた。

ティアナとスバルの一日が、始まる。

高町なのはの訓練は熾烈を極める。

しかし、薔薇ローゼンリッターの騎士分隊のエリオとキャラに言わせれば、まだ温い方らしい。

「なのはさんの訓練を熾烈と言うならシェーンコップ隊長の訓練は破滅ですよ」

「そんなにすごいのか？」

エリオの意見にフェイトが質問すると、キャラが答える。

「ええ、破滅です。壮絶、とか激烈、を軽く超越して破滅です」  
そのような破滅級の訓練を受けて外見が微塵も変わらない二人をみていると怪しい薬でも使っているのではないかと（特にフェイトに）心配されている。

さて、FWの四人は基礎訓練を終え、午前中のまとめとして模擬戦に移った。

「あれ？二人は参加しないの？」

スバルが聞いたのはエリオとキャロが見学者にまわったからである。

「僕らはもう終わりましたよ」

「あ？そうなの」

ティアナはそんなやり取りを見てエリオとキャロがどのような白い悪魔とやりあったのかが気になった。

見学者はラインハルトとキルヒアイスにロイエンタール & amp; オーベルシュタイン、ヴィータと薔薇の騎士分隊の3人、ヤンである。

そしてそこにもう一人女性が現れた。

「ゴメン、模擬戦もう始まってる？」

仕事の関係でフェイトが遅れてやってきた。

「今からですよ」

キャロがスターズ分隊の二人に視線を固定しながら言った。

「ホントは、この模擬戦、私がやるうと思ってたんだけどね」

「なのは最近訓練濃いからな。しっかり休ませてやんねーと」

最近のなのは寝る間も惜しみ訓練の構想、審査等を一人でこなしている。

「僕も、一緒に手伝おうとはしてるのですが・・・」

「高町にもう寝ると言われるんだな、キルヒアイス」

そのような話をしていると模擬戦が始まった。

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータの声に全員が視線を戻す。

「クロスファイアー、シユート！」

橙色の魔力弾がなのはにさっとうする。

「！」

しかし、流石はエース・オブ・エース。なんなく防ぐ。

そこへ間髪入れずにスバルがウイングロードを駆けてなのはに向かって攻撃を繰り返していた。

スバルは咆哮をあげながら拳をなのはへと向ける。しかし、防がれ、弾き飛ばされる。

「うわあ！」

「コラ！スバル、危険な軌道！」

「すみません！大丈夫ですから！」

なのははそれを軽く聞き流しながらティアナの影を探した。

それは直ぐに見つかる。ビルの上で砲撃体勢をとっていた。

同じく見学組もそれを見つけていた。

「ティアナが砲撃を！？」

フェイトは驚いたが、ラインハルトは違う点で驚いていた。

フェイトは気づいていないが、なのははスバルのウイングロードが交錯する場所の中心点にいる。つまり、ティアナはそれを利用して航空魔導師に対抗できるのだ。

恐らくあのランスタールは幻術だ。

ラインハルトがそう思うとそれを証明するかにようにビルの上のティアナは消え去った。

「あつちのティアナさんは幻術！？」

「本物は……！？」

キヤロとエリオが驚いた。

再びティアナを探そうとするなのはにまたもスバルが唸りながら攻撃してきた。

それもやはり防がれるが、スバルは簡単には吹き飛ばされず、耐えた。

「ティアアアア！」

そして、その呼び掛けに応じてティアナがなのはを取り囲むウィングロードのひとつを駆け上がり、魔力を銃剣状にしたクロスミラージユを構えて飛び上がった。

「一撃必殺！であアアア！」

ティアナの渾身の一撃がなのはへと突き進んだ。が。

あろうことが、なのははレイジングハートを待機状態に戻し、魔力の保護なしの素手で剣を握り受け止めた。

「!？」

ティアナは勿論、スバルも、見学者も驚いた。

なのはは下を向いていて表情は読み取れない。しかし、ひとつだけ言えることがあった。

「不味いですよ」

キルヒアイスの呟いた言葉にラインハルトは首をかしげる。

「どういうことだ？」

「彼女、とてつもなく怒っています」

「おかしいな」

それは正しく恐怖そのものだった。

「二人とも、どうしちゃったのかな？」

言葉がでない。空気そのものが口を開くことを阻止しているようだ。

「一生懸命なのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃあないんだよ。訓練の時だけしっかり言うこと聞いたふりをして、本番でこんな危険な無茶するなら、練習の意味、ないじゃない」

銃剣部分を強く握っているからか、なのはの手には血が滲んでおり、それは直ぐに明確な流血となった。

「ちゃんとさ、練習通りにやろうよ」

次の瞬間、握る力を強めたからか、刃は掌に更に食い込み、なのはの掌からは血が吹き出した。



「アッ!？」

ティアナは思わず目をそらす。そして銃剣を収納したあと、後ろへと跳んだ。

「私はッ!」

それはティアナの魂の叫びだった。

「もう、誰も傷つけたくないから!無くしたくないから!」

銃口を必死でなのはに向けようとするが、腕が震え、定まらない。

「だから・・・強くなりたいんです!!」

しかし、それへの回答は余りにも冷たく、暴力的だった。

「少し・・・」

指をたて、震えるティアナへ向ける。

「頭冷やそうか」

指先に魔力が集中すると見学組に戦慄が走った。

「クロスファイアー」

「アアアアア!ファントムブレイズ!」

「シユート」

桜色の光線が、怒りを孕んでティアナに命中し、粉塵を巻き上げた。

「!?!」

見学組の所まで爆風が吹き込んできて、暫くラインハルト達の視界をふさいだ。

粉塵がはれる。

ティアナは辛うじて耐えたようだが、その瞳はどこも見つめておらず、大きな孔を連想させた。

なのはが、再び魔力の集束をはじめ。

スバルは勿論止めようとした。しかし、封じられる。

「なっ!バインド!?!」

「スバル、よく見ておきなさい」

「えっ!?!なのはさん!」

桜色の怒り。

ラインハルトはこのとき、ティアナを守るべきか、そのままにしておくべきか迷った。

ラインハルトは人の心境を理解するのが苦手だった。その事もあり、対応が遅れたのだ。

怒りのかたまりは無抵抗のティアナへと直進していき、再び爆発を起こした。

「・・・ティアアアア！」

スバルの絶叫が訓練場に飽和した。

だが、なのはは煙を凝視したあと、目を細めた。

煙がはれる。

「ラインハルトさま、あれを！」

キルヒアイスの指す方向をみると、ティアナは確かに倒れていた。が、それはシヨックによるものだろう。

そして、その倒れたティアナを守るような形で装甲の厚い同盟軍艦艇が盾のごとく整列していた。

全員が、振り向く。

そこには、頭を掻くヤンの姿があった。

続く

日記は今日もお休みです。

やはりアンケートはある種の禁忌でしたね。

フェイト「アンケート？」

なのは「ほら、ラインハルトさんから聞いたじゃない。私が銀英伝キャラだと誰になるかって」

はやて「結局は、作者の偏見等から決定されるわけやな」  
はい。

全員「・・・」

まま、それはさておき、発表しましょう。先ずははやてさん！

はやて「ウチかいな!？」

はやてさんは文句なしでヤン・ウェンリーでしょう。

はやて「おお!」

はやての服が機動6課の佐官用制服ではなく、ヤンの着ていた軍服になる。黒い軍用ジャンパーにベレー帽、アイボリーホワイトのスラックスにハーフブーツである。

全体的に地味な人にはよく似合う。

はやて「なんか言った?」

いえ。ユリアンあたりにミウラを配置しましょう。次はフェイトさんです。

フェイト「私は誰ですか?」

フェイトはラインハルトですねー。執務官服が黒に銀だし。金髪だし。

フェイトの服が黒地に銀をあしらった帝国軍の軍服に変わる。肩には金モールがついており、大きなマントを翻していた。

似合ってるよー。金髪には黒い服が似合うのかねえ?

フェイト「えへへ・・・」

最後はなのはさん!

なのは「私は誰なの?」

迷いましたよー。ラップとかにしようかなーとも思った。でも主役だし。

なのは「ワクワク」

長考の結果、これになりました!」

なのはの服が帝国の装甲服にかわり、手にはレイジングハートの代わりに大きな戦斧が握られている。

ミンチメーカーこと、オフレッサーです。

なのは「・・・」

なのはさんはミンチメーカーの名にふさわしい活躍を・・・あれ?なのはさ・・・ギヤアアア・・・」



願ひ、二人で 後編（後書き）

ご意見、ご質問、ご感想、お待ちしております。

大切なこと 前編（前書き）

今回はヤンさんが大活躍です。

## 大切なこと 前編

なのはヤンを凝視している。

静かで暴力的なその怒りの矛先はティアナではなくヤンに向けられていた。

「なんです？」

なのはがポツリと呟いた。フェイトが青ざめてヤンに言う。

「ヤンさん、不味いですよお・・・なのはあり得ないくらい起こってます」

「そんなこと言われても」

「ヤンさん、邪魔しないでください。これは私とティアナの問題です」

なのはのオーラが見えるとしたらきつとどす黒い靄となっているだろう。

フェイトは少しおどおどしたが、おどおどしているのが自分だけだと気づき、心を落ち着かせようとした。

「ヤンさんも、頭冷やす？」

ヤンは頭を掻いて答えた。

「いや、頭を冷やすのは君だと思うけど・・・」

次の瞬間、なのはの指先が煌めき、先程までヤンがいたポイントを桜色の光が抉った。

ヤンは間一髪、ラインハルトに空中へ引き上げられていた。

「こりゃ参った」

「何を呑気なこと言っているんだ。オーベルシュタイン、卿の攪乱魔法で高町を少し足止めしてくれ」

「御意」

すると、オーベルシュタインの瞳が点滅した。

「あれ？何も見えないの」

オーベルシュタインの使った魔法は相手を一時的に失明させるも

のだった。しかし、なのは程の魔導師ならすぐに視力を回復するだろう。

「キルヒアイス、来い！」

「はい、ラインハルトさま」

三人は数キロ離れた区画へと飛び去った。

暫くして、視力を回復したなのははおぞましい形相でエリアサーチを始めた。

それを見ていたキャラロに念話が入る。

『キャラロ、聞こえるか』

『シェーンコップ隊長。どうされました？』

シェーンコップの念話は察知されないように弱く発信されていたため、集中しないと聞き取れなかった。

『金髪の坊やから伝言だ。すぐに指定のポイントへ来てほしいらしい』

『超過勤務です。それには従いかねます』

『・・・お前最初はもっと素直だったぞ』

『ジョークですよ。わかりました。すぐ向かいます』

キャラロはオーベルシュタインにもう一度攪乱魔法を使用してもい、怒り心頭のなのはを横目に見ながらフリードとヤン達がいる場所へと飛び立った。

その十数分後、再び攪乱魔法の呪縛から解き放たれた悪魔はヤンを探し始めた。

だが、先よりもそれは早く見つかった。

数キロ先にヤンの艦隊が浮遊していたのだ。

なのははそこへ向かう。

同盟艦隊は当然のように迎撃態勢をとった。

「邪魔なの！」

しかし、怒り心頭のなのはにはそれは只の障害物にしかすぎない。



障害物は破壊する。同盟艦隊は水をかけられたオブラートのよう  
にぐずぐずと崩れていった。

だが、ヤンの艦隊はこれだけではない。

なのはは向こうに同じ規模の艦隊を発見した。あの艦隊を潰して  
いけばヤンの所へ着くだろう。

艦隊を破壊する。そしてまた向こうで別の艦隊が布陣していた。

その終わりなき破壊を見守る影があった。

その存在はなのが意識をそのまま左に向けたら簡単に見つける  
ことが出来た。

数百メートル離れた地点のビルとビルの中に、ヤンはいた。

彼の右手にはデバイス「ヒューベリオン」が握られており、そし  
て前にはヤンの身長の2.5倍程の大きさの銀色に輝く球体があっ  
た。

「ヒューベリオン、トゥール雷神のハンマー」のエネルギーは？」

《現在、約99.993%。まもなく臨界です》

ヤンの一撃必殺とも言える大技「トゥール雷神のハンマー」のチャージが  
ものの十数分で終わるわけがない。否、そもそも彼にそれほどの魔  
力はないし、疲れるのだ。

しかし、この不可能を可能にしたのがキャロのブーストである。

「ありがとうキャロ君。今度何かご馳走しよう」

「エリオ君もいいですか？」

「勿論」

ヤンは再び前に向き直る。ヤンに射撃の腕はないが、それについ  
てはデバイスがやってくれる。

「本当は、あまり使いたくなかったのだが・・・」

ヒューベリオンがなのはを捕捉したことを伝えた。

当のなのはは気付かずに破壊のワンマンショーを繰り広げていた。  
ヤンは空いた左腕を軽くあげて、振り下ろし様に静かに言った。

「撃て」

その瞬間、銀色の球体　イゼルローン要塞のミニチュアは一点

に魔力を集束させ、巨大な白い光の柱を吐き出した。

それに気づいたなのははとっさに対応した。

「デイバイン・バスター！」

白と桜色の光がぶつかるが、均衡を保ったのは0.1秒にも満たなかった。

圧倒的な力を誇る雷神トールのハンマーはすぐになのはを呑み込んだ。

光の柱が天に向かって伸びていく光景をみてラインハルトはヤンが勝ったことを悟った。

今にして思えば、ヤンとなのはの会話もこの作戦の一部だったのではと思う。

極限の興奮状態に陥ったなのはをマリオネットを操る人形師のように射線上へ誘い込んだのだ。

戦術にメンタルを持ち込むのは常識だが、ここまで鮮やかにやるとは。流石である。

見学組も遠くでとんでもなくすごい魔法が使われたことがわかった。

そして数秒開けてフェイトの元に通信が入った。

『ブランドーをたっぷり入れた紅茶を用意して下さい』

フェイトはハア、と溜め息を一つついてティアナを医務室に送ったばかりのシャマルに念話で語りかけた。

『シャマル先生、患者がもう一人増えましたよ』

続く

## 機動6課日記

#月 日

最近変な噂を聞いた。ラインハルトさんは前の世界では皇帝をやっていたとか。で、キルヒアイスさんはラインハルトさんの執事だ

ったとか。

真偽を確かめるため、ラインハルトさんに聞いてみた。勿論オブ  
ラートに包んで。

だけどラインハルトさんは

「キルヒアイスは俺の親友だ。あいつがいなければ俺は只のダメ人  
間だからな」

といった。

でも、なんでキルヒアイさんはラインハルトさんを「ラインハ  
ルトさま」と呼ぶのだろう。

謎だ。

久し振りにあの閉め言葉を。

時空の歴史が、また1ページ・・・

大切なこと 前編（後書き）

次回はラインハルト達とティアナです。

## 大切なこと 中編（前書き）

ちよつと遅くなりました。眠たいので所々やつつけですが、許してください。

## 大切なこと 中編

ゲンヤ・ナカジマ三佐は陸士108部隊の隊長、つまりヤン・ウ  
エンリー直属の上司である。

彼は今ミッドチルダの中央区にある居酒屋の一室で若い女性とテ  
ーブルを挟んで向かい合っていた。

と言っても別に二人は愛人同士というわけではない。強いて言う  
なら先生と教え子だ。

「どうだ八神。ヤンは役にたっているか？」

「ええ、いつもいるんなことを教えてもらってます」

はやての答えを聞いてゲンヤは愉快そうに笑った。

「あいつは、平時においては自分で名乗るほどの穀潰しだからな。  
役にたつて嬉しいな」

ゲンヤは一頻り笑うと表情を硬めた。その様子から今から話され  
ることがどの様なものが予想できる。

「先ず、こいつを読んでくれ」とゲンヤはおもむろに内ポケットか  
ら一つの茶封筒を取り出してはやてに手渡した。

「今朝がた、ビュコック中将から預かったものだ。中身は見えていな  
い」

はやてはビュコックの書いた文字を一字一句逃すことなく読み取  
っていった。そして、半ばまで読んだところで顔が強ばった。

「どうした？」

はやてにとつてこの手紙に書かれていたことはかなりの衝撃だっ  
たが、何処かやはり、と思っっている自分がいた。

手紙の内容を極端に要約するところなる。

レジアス中將には十分注意すべし。

目が覚めたとき、視界には清潔な空間が飛び込んできた。

「ここは・・・」

医務室だ。ということとは、ここにはシャマル先生がいるはず。そう考えたとき、図ったようなタイミングで医務室の主が出現した。

「あら、起きた？」

ティアナはシャマルに曖昧な返事を返し、備え付けの時計を見やっつた。

「えっ！？9時！？」

「よっぽど疲れが溜まっていたのね。余りにもぐっすり眠っていたから死んだのかと思ったわ」

その時何気無く自分の足元を見ると下着一丁で太股が露になっており、思わず赤面した。

「なのはちゃんの魔法ほ優秀だし、ヤンさんも護ってくれたから外傷はないと思うけど・・・取り合えず、後でヤンさんにお礼、しときなさいね」

シャマルがその様なことを話していると誰かがドアをノックした。ノックした人物たちは返事を待たずに医務室に入ってきた。

「ラインハルトさんに、キルヒアイスさん・・・」

もう二人のことはよくわからなかったが、ラインハルト関連であることは十中八九間違いない。

「どうだい？調子は」

キルヒアイスが優しく話し掛ける。

「大丈夫です」

「ランスター、何故お前はそう無茶をするのだ？」

間髪入れずにラインハルトが問いてきたことにティアナは少し動揺した。

「何故って・・・」

ラインハルトが言う無茶は今回の模擬戦のことだけでなく、異常なまでの過密訓練のことも含まれる。

「・・・それは、フェイト隊長や、なのはさんのようになりたいからです」

ティアナは言う。自分みたいな凡人は多少の無茶をしなければなのはやフェイトみたいにはなれない。

しかし、その回答に同調するものは一人として居なかった。

ロイエンタールが言った。

「何故そう人の背中を追う」

「凡人は自らを高めるためには人の背中を追うしかないんです」

ティアナは今、非常にネガティブな精神状態にある。自己を過剰否定してしまうのだ。

しかしと、ラインハルトは言う。

「ランスターの才能を伸ばすポイントは、その魔導師としての素質だけではないぞ」

「それ、どう言うことですか」

「俺はランスターの戦闘を見学していたが、敵を自分に有利な状況へ誘い込むということは緻密な計算によるものだ。あれをほぼ完璧に成功される点においてはランスターは優秀な指揮官だ」

ティアナは少し黙り、思い出したかのように言った。

「指揮官としては、八神部隊長やヤンさんとかにはかないません」

ここで、意外な人物　オーベルシュタインが会話に介入した。

「八神部隊長は勝つための作戦を考えているのではない。負けたくない作戦を考えているのだ　ヤン・ウェンリーと同じく。しかし、ランスターの作戦は勝つためのものだ。同列で考えてはならんと思うが」

ここでオーベルシュタインは周りのポカンとした顔を見て心なしか、頬を朱に染めたようだった。いや、思い込みだろう。

とにかく、とラインハルトが繋いだ。

「自分を信じていることだ。人のことを追ってばかりでは出来ることも出来ないからな」

これだけ言うと、ラインハルト一行はシャマルに追い出されるようにその部屋を後にした。

ティアナは馬鹿ではない。だからラインハルトたちの言うことは



分かるが、それを認めたくないと少し思った。

そんな自分に嫌悪感を抱いた彼女は意味もなく壁を見つめていた。仮にティアナに透視の能力があれば隣でヤンと対峙するなのはの姿を捉えることができたであろう。

「ヤンさん……」

これは呼び掛けというよりある種の糾弾であった。

「なんで、あるときティアナをかばったんです？」

なのはは極力平常心を保ちたかったが、思わず声が震えた。

「なんでと、言われても……」

またヤンのこの飄々とした感じも気に入らない。

しかし、今の彼女は何を見ても気に入らないというだろう。

「あれは、私の教導です」

「だが、部下に暴力は良くない。私は部下を殴る上司を多く見てきたが、そいつらは揃って無能だったよ」

「ティアナなら！ わかってくれます」

なのはは後半の声小さくなっていくのを知覚してしまったと思っただ。

「その根拠はないだろう。殴って何故殴られたかはあの年頃が一番わからないものだよ」

「だけど……！」

なのはにはもう反論材料はなかった。しかし、ついつい言葉を放ってしまう。

そんなときな、ヤンは言った。

「高町君、高町君」

ヤンは絶対に怒鳴ったりしない。

これは生前から同じで、師弟であり息子のユリアン・ミンツも怒鳴られたことはなかった。

しかし、ヤンも人間なため、怒ったり不機嫌になったりする。

そのときはいつもヤンはこう言っていた。「ユリアン、ユリアン」

「高町君は、もしもテイアナの心に深い傷をつけていたら、どうする？これが原因で任務もままならなくなるかもしれないし、下手をしたら自ら命を絶ちかねない」

ヤンの言ったことはかなりシヨックだったらしい。よくあることなのだが、なのはは驚きのあまり目を大きく開いた。

「それでも君はあれが自分の教導だと言えるかい？」

なのはは言葉に窮した。そして、暫く考えたあと、なのはは恐る恐るヤンに聞いた。

「私、どうすればいいでしょうか？」

後生の管理局史に詳しい歴史家によると、ここを境に高町なのはの教導スタイルが少し変わったらしい。

「資料を読むと、私のマ・・失礼。高町一佐、当時は一尉でしたが、こここの辺りを境に教導スタイルが『お話という名の修正』から真正正銘の『お話』に変わっています。会話は、日記を元に記していますが、ほぼ、完璧に再現できているでしょう。ええ、こういうものは正確に書く主義らしいですよ」

続く

日記

#月§日

キャロから聞いた話だけど、ヤンさんがこんど何か奢ってくださいらしい。

シェーンコップ隊長は基本的に奢ってはくれないから食費が浮いてラッキーだ。

そういえば、なのはさんがヤンさんに負けたらしい。ますますヤンさんは何者だろう。

## 大切なこと 中編（後書き）

『後生の歴史家』はこれからもちよくちよく出てきます。

親が局員で、過去の事件にも深く関わったことがあるらしく、今は無限書庫付属大学で管理局、時空世界の歴史を研究しているそうです。

誰でしょうねえ。

大切なこと 後編（前書き）

またちょっとたどたどしいかも。

## 大切なこと 後編

グリフィス・ロウランは八神はやての副官である。

少々融通の利かないところはあがあるが、はやてが不在の際は彼が代わりに指揮を執ることになる。優秀なのだ。

そのグリフィスに呼び出されたはやては急いで司令室に入った。

「臨海空港近海の上空にガジェット？型が30機飛行しています。性能面でも、かなりの強化が加えられているようですね」

「こういうものは、ほっておくのが一番えんやけどな」

「そういうわけにもいきません。空港から早急に対処されたしとの連絡が」

はやては軽く頭を掻いた。こういうところがヤンと似ている。

「じゃあない。隊長たちに、制空権を回復するように伝達してや」

「完全な自立兵器には小細工は効かない。正面からガツンといくしかないのだ。」

グリフィスがアラームのスイッチを押し、マイクに向かって命令伝達を行った。訓練通りうまく準備が済めば1、2分もあれば出撃可能となる。

あとは前線の仕事だった。

スターズ分隊と薔薇の騎士分隊、ラインハルト達にフェイトを加えた面々がヘリポートに終結していた。

「今回は空港近海の上空に展開するガジェットの殲滅が目的だね。」

空戦だから、私と、フェイト隊長、ヴィータ副隊長が上がる」

なのはは任務概要を説明した。

「それ以外は戦闘待機ね」

「そっこの指揮はシェーンコップ三佐とキルヒアイスだ」

ヴィータが言うとなのはがティアナをちらと見た。

「ティアナ、今日は待機から外れとこうか」

その時ティアナとの目が見開かれ、なんとも言えない感情を顕にした。

そして、その変化を感じ取ったなのは付け足すように言う。

「あ、ティアナは体力、魔力共々まだ完全じゃないから」

「言うこと聞かない奴は・・・」

なのは話の途中で急に割り込んだティアナに全員の視線が集中した。

「言うこと聞かない奴は、使えないって、ことですか」

一瞬、その場が凍りついたかのように硬直し、それが溶けたとき、なのは眉をしかめながら「自分でいってわからない？それ、当たり前のことだよ」と諭すように言った。しかし、ティアナには通じない。

「現場での指示や命令は聞いています・・・まあ、ホテルでの件はあれでしたけど・・・教導だって、ちゃんとサボらずやってます！」  
一瞬力を無くしたものの、再び声を張り上げるティアナの顔には悲しみと言うか、恐れと言うか、とにかくやはりなんとも言えない表情が張り付いていた。

そんなティアナに見かねたヴィータがティアナにつかみかかろうとするが、なのはに防がれてしまう。

視界の隅で行われたその行動に気づくこともなくティアナは更に続けた。

「私は、なのはさんみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能もなければキャロみたいなレアスキルもない。そして、死ぬほど努力して、強くなるしかないじゃないですかッ!？」

一人叫び続けていたティアナの語尾が上がったのは、彼女がシグナムに胸ぐらをつかみあげられたからである。

怒りを顕にしたシグナムは拳をあげ、ティアナへ修正を加えようとした。

殴られる、そう思ったティアナだったが、覚悟していた衝撃や痛みは訪れなかった。

恐る恐る目を開けると、そこには振り上げた拳をガツチリと掴むラインハルトの姿があった。その姿は、古代ローマの芸術を連想させるほど美しく、神々しいものであった。

「・・・ローエングラム、なんのつもりだ」

ラインハルトはなにも言わない。というより、言える立場ではなかった。

元帥だった頃や皇帝だった時はいざ知らず、今はたかだか三等空尉。今のラインハルトに残された選択肢ほ謝るぐらいしかない。

仕方なく、掴んでいた手を離し、心のこもらない謝罪の辞を述べようとしたのだが、ここで思わぬ助け船が入った。

「待ってください」

そういう声が聞こえた。その方に目をやると、キルヒアイスが堂々とした足取りで此方へと向かってきた。

「ローエングラム三尉に貴官の暴拳を止めるよう指示したのは私です」

「キルヒアイス・・・一尉」

シグナムは何かを言おうとした。しかし、キルヒアイスが先手を打つ。

「部下に手をあげるなどというのは八神部隊長から厳命されているはずです。このような場所で、主人の期待に背くものではないですよ」

最後の言葉がシグナムにはかなり効いたようで、彼女はうつむき加減で引き下がった。

キルヒアイスはなのはに一礼してラインハルトと共に下がった。

「すまない、キルヒアイス。またお前に助けられた」

ラインハルトが小声でお礼を言うと、キルヒアイスも先程とは違って代わり口許に微笑を浮かべ、ラインハルトの行動の感想を言った。

「ラインハルトさまは少し変わられましたね」

「何がだ？」

「私はラインハルトさまがあそこでシグナム二尉の修正を止めると

は思いもしませんでした」

振り返ってみると自分でも何故あのようなことをしたのかわからなかった。

「そうだな・・・まあ、何となくだ」

そんなやり取りを見ながらオーベルシュタインは言う。

「カイザーも変わられた。昔ならあのようなところへ介入したりしなかった」

それに対しロイエンタールは言う。

「俺としては、冷酷無比な軍務尚書がランスタを優しく諭したことの方が意外だった。いや、最早不気味であった」

「なんだと。卿に言われるとは心外ですな」

「そのようなことを言うな。明日の休みは卿のいきたいところへ連れていかんぞ」

「・・・」

ロイエンタールは黙ったオーベルシュタインから目を離し、なのはの方を見た。

何かを叫んでいたが、ヘリのローターにかき消されてこちらまで聞こえなかった。

キルヒアイスとシェーンコップの提案で、シャーリーことシャリオになのはの過去と教導について話してもらったことにした。

見せられたのは数字の羅列とも言えるデータだったが、シャーリーの語りが上手いのか、ティアナ達だけでなく、ラインハルトの心にも強く心に刻み込まれた。

なのはの過去、重傷をおい、生死の境を行き来したこと。教導の意味・・・。

「・・・なのはさんはね、みんなに同じ目に逢ってほしくないんだよ。だから一生懸命、本当一生懸命に教導してるんだよ・・・」  
話しはそう締められた。

ティアナはこの話しを聞いて己の未熟を恥じた。



ホテルでの事、訓練での事。あれは誰のためのものだったのか。結局、自分のことしか考えていなかったではないか！

この時、はじめてティアナはなのはに謝ろうと思った。

ラインハルトとキルヒアイスが隊舎の外を散歩していると、見慣れた三つの人影が垣根の陰に身を潜めていた。

「・・・薔薇の騎士ともあるうものが何をしているのだ」

声をかけられたシェーンコップとエリオ、キャロは振り替えるとシートと黙るように警告してきた。

なんだと思つたラインハルトが三人の視線の先を見ると、そこには漆黒に染まつた海を眺めるティアナの姿があつた。

そこに、缶コーヒーを二つ持ったなのはが近づいてきて、なにも言わずに隣に座る。

暫く沈黙が続いたが、なのはがコーヒーの蓋を開け、話しを切り出した。

「私ね、ヤンさんに怒られちゃつたの」

掌でコーヒーを弄んでいたティアナが「えっ？」となのはの顔を見る。

「私、取り乱しちゃつて、ティアナに砲撃しちゃつたでしょ。その事」

「でも、あれは・・・」

ティアナは私のせい、と言おうとしてやめた。なのはの話の邪魔になると思つたのだ。

「ティアナは賢いから、こうやれば分かるだろうと思つただけど・・・わかつてないのは私だつたよ」

なのははティアナの方を見ると「ごめん！」と謝ってきた。

「えっ、あ！？わ、わたしこそ、ご免なさい・・・」

そういうと、なのはは思い出したこのようなりアクションを見せ、急にティアナのクロスミラーシユに何かしらのパスワードを吹きこんだ。

「ティアナは、執務官志望だったね」

なのはティアナに指示を出すように言う。ティアナがその通りにすると、クロスミラージューは瞬間、オレンジの光を放ち、ダガーへと変形した。

「えっ？」

「執務官になるとそういう任務もたくさんこなさなくちゃいけないからね」

ふと気付くと、ティアナの目に涙が溜まっていた。

なのはさんは、自分のことを、考えてくれていたんだ……。

「これはもう少し後で教えようと思ってたんだけど」

なのはが言い終わる前に、ティアナは彼女の体に顔を埋め、謝罪の言葉を吐きまくっていた。

「ご免なさい！ご免なさい！ご免なさい……」

泣きじゃくるティアナに初めは驚いたが、直ぐに慰めてくれた。

「ほらほら、明日の休みはスバルと出掛けるんでしょ？泣いてたらスバル、心配するよ」

なのははティアナのコーヒーの蓋を開け、ティアナに手渡した。

まだしゃくりあげるティアナは、ヒックヒック言いながらコーヒーを口に含んだ。

「苦……」

しかし、その苦さも今は心地いいものだった。

因みにこのあと、覗き見をしていた五人はなのはからお説教をうけた。

続く

今回は日記無しです。

次回、前々から書きたかった休日のお話。

機動6課の休日 前編（前書き）

ほのぼの系ですが、これから激動していくわけです。

## 機動6課の休日 前編

歴史は、この日にかなり動いたと言えるらしい。

「この事件は管理局、聖王教会等の思惑や陰謀が強く絡まり発生したものです。書く言う私も、その副産物ではあるのですが・・・。とにかく、自分で言うのもアレですが、私のことを先に見つけたのが6課であったことはこの先かなり優位に働いたことでしょう。いわば、ここが歴史の分岐点だった訳です」

休日。それは日常における縛りから解放される自由の日。リハティ・デイ

ラインハルトもその休日を消費する権利のある人物の一人で、ここに来てからまだまとめに街を観察したことが無かったこともあり、るぶを読み、キルヒアイス辺りと街へ繰り出そうかと考えていた。前々からミッドチルダの経済状況や社会について情報がほしかったし、ちょうど旨いフリカツセの店もあるらしかった。

しかし、断られてしまった。

「申し訳ございません。今日はなのはさんと明日からの訓練についてミーティングがあるので」

言われてみれば、隊長達は今日は普通に勤務日だった。

地理的なこともあり、誰かと出掛けたかったのだが、FWの面々は既に街へ出ており、ロイエンターとオーベルシュタインも何処かへと行ってしまっただけで誰もいない。

少しふてくされて、気が付けばロビーをつろつろしており、そんな自分が少しおかしかった。

「銀河帝国皇帝ともあろうものが、情けない」

年甲斐もなくはしゃいでいるとでもいうのだろうか？

「それも、悪くないかもな」

これまで肉体や精神を酷使してきたのだ。このような精神的休養も必要だろう。

ラインハルトはここに来て、肉体的にも、精神的にも若返っていた。

しかし、何かが違う、とも考えていたのだった。

心配性のフェイトから脱出し、エリオとキャロはようやく電車に乗り込めた。

窓の外に広がる風景は秩序的に起立したビルの群れで、地方出身の二人にとって心踊るものがあった。

「すごい都会だね・・・」

「うん」

エリオは暫くビルの群れに見とれていたが、キャロに声をかけられ、そちらを向いた。

手には鉛筆と大学ノートがある。

「なにそれ？」

「私ね、ちよつと絵を描いてるんだけど、ここに来てエリオ君の絵をまだ書いてなかったなーって思い出して」

エリオはキャロにノートを見せてもらった。

人物画から風景画、スケッチ等それは多種に及んだ。

人物画は6課メンバーを描いており、中でもデフォルメされたなものが怪しいオーラをまとっているのには変に納得してしまい、思わず吹き出した。

「上手いもんだね」

キャロはえへへと笑い、エリオからノートを受け取る。

鉛筆が走り始めた。

それは縦に動き、横に動き、はらったり、擦ったりと見ていて飽きることはない。

絵は駅につく数分前に完成した。

「出来た！」

エリオはひょいっとキャロの手からノートを取り上げた。

「あっ！勝手にとってかないですよ」

クレームをつけるキャロを尻目にノートに描かれた自分を見ている。

それは、プロの目から見ても十分なものだった。しかし、客観的に見れないエリオには「上手な絵」としか捉えることが出来ない。

絵の中の自分はやや緊張していた。

「僕こんな緊張してたかなあ」

「してたよ。カッチカチよ、カッチカチ」

そう言って二人で笑ううちに目的地へ到着した。

とにかく、初めての休日だ。すっかり楽しまなくてはならない。

その頃機動6課隊舎では、ラインハルトとヤンご何故か並んで歩いていた。

そこへ、キルヒアイスが通りかかる。

「あっ、ラインハルトさま。ヤンて・・・三尉も。どうされました？」

「いや、何故かヤン・ウエンリーと出かけることになった」

「暇人同士、くつついた訳です」

キルヒアイスはなるほど、と言って少し笑った。

「何がおかしいのだキルヒアイス？」

「いえ、ラインハルトさまが、私や、アンネローゼさま以外の方とお出かけになさるなどは珍しいと思ひまして」

ラインハルトはそうか？と聞き返し、行ってくると言った。

「てはヤン三尉、ラインハルトさまを、お願いします」

ヤンはラインハルトの後について歩きながら片手を上げた。

キルヒアイスにとって元々体質的に敵を作りやすいラインハルトが自分以外と親睦を深めることは喜ばしいことであった。

ここへ来てやはり変わられた。

しかし、キルヒアイスもラインハルトの根本とも言える何かは抜け落ちているような気がしてならなかった。

ティアナとスバルは近くの屋台でアイスを買い、公園のベンチに腰を下ろしていた。

「いったただつきまーす!」

ティアナの数倍の数及ぶアイスの塊のひとつをスバルは一口で食べ、幸せそうな声を上げた。見ているこっちが頭キーンとなる。

「スバル、これからどこ行く?」

「ゲーセンいこうよ、ゲーセン!」

これにはティアナも賛成だった。シューティングゲームに自分の銃撃が通用するかどうか気になる。

そんなことを考えていると、向こうから軽やかな楽器の音色と人々の祈りの声が聞こえてきた。

「なにあれ?チンドン屋?」

「バカ、違うわよ・・・あれは、ベルカ新教の信者ね」

スバルは再び口一杯にアイスを詰め込み、口をモゴモゴさせながら聞いてきた。

「なにそれ?」

「あんたそんなのも知らないの?聖王教会の組織の一つで、全ての人はベルカの地を信仰すべきだと言う集団で　ちよつと過激な人達ね」

ティアナはその行列を眺めながら、近い将来何かしらやかすかもしれない人々を一人一人眺めていった。

この予言めいたものは後に実現するのだが、その事を知るものはまだほんの一握りしかない。

日記は次回まとめます。

## 機動6課の休日 前編（後書き）

キャラのオリジナル設定は薔薇の騎士連隊のあの方を意識しています。

そいで次回は最近ちょこちよこ出ているあの子が登場する予定です。

期待せずにお待ちください。



トンネル内部には横転したトラックの残骸や積み荷が散乱していた。

ギンガ・ナカジマ陸曹はそこへ現場検証の手伝いとして派遣された女性である。

「状況は？」

「運転手は怪我も無く、現在、事情聴取を行っているのですが・・・」

「ギンガが鑑識の歯切れの悪さに気付いた。」

「なにか、あったのですか？」

「運転手が錯乱状態で・・・先程からなにかを呟いているのですが、全く聞き取れません」

彼女はふうん、と頷き、その運転手との面会を求めた。

運転手は地面に座り込み、警邏から事情聴取を受けている最中だった。その目は虚ろで、人間の尊厳を失ったようにも見える。

ギンガが警邏に代わり質問を行おうとした。が、しかし、運転手は唐突に雄叫びを上げたと思うと口をモゴモゴさせ始めた。

周りの警邏や鑑識はすつとんきょうな顔をしていたが、ギンガだけがその状況が理解できた。

ギンガが運転手の口に直接手を突っ込む。

「毒だわ！吐きなさいッ！」

周りが騒然となるが所詮はそれだけであり、結局運転手は白目を剥いて絶命した。

「これでは何もわからない・・・」

しかし、女神の残照が少ない証拠品の一つを残してくれた。

「陸曹！こちらへ」

呼ばれた所へ行ってみると明らかに通常の荷物とは一線を逸した残骸が一つ転がっている。

「これは・・・生体ポッド？」

勿論、それが誕生したその瞬間から残骸であったわけではない。恐らく中には何かが入っていただろう。

ふと横を見ると、そこはなにかを引きずったような痕があった。まだ新しい。

その後をたどれば、真実に出会うことが出来るだろうか。

ジエイル・スカリエッティは特に何かするでもなく専用の椅子に腰を下ろしていた。

『ドクター』

通信が入り、画面には美しい女性の顔が映った。

『秘匿回線で通信が入っています』

「どこからだい？」

『聖王教会から』

スカリエッティは繋いでおくれ、と指示を出し、口元に笑みを浮かべた。

画面に先程とは違って代わり男の顔が映るが、極端に暗いため顔が読み取れない。

「これはこれは大主教倪下。どうされましたか？」

『いやな、部下の失態で我々の財産が外へと漏れ出してしまった。』

そこで、スカリエッティ殿に力を貸していただきたい』

スカリエッティの目が怪しく光る。

「ほう！？財産とは」

『聖王女オリヴィエのクローン・・・とでも言うておこうか』

聖王女オリヴィエ！ベルカの時代を生き、没後数百年経った今もなお支持を受けている女性。最後のゆりかごの聖王！そのような女性のクローンとは・・・

『今はまだ6歳のこどもだがな。確保してくれた暁にはそのクローンと共にあるレリックを貴君にくれてやろう。悪い商談ではあるまいて』

スカリエツティは顔が綻ぶのを堪えるのに必死だった。

断る理由はない。これで娘達の仕事もふえるだろう。

「わかりました。お受けいたしましたよう」

恭しく頭を下げる。そこでスカリエツティはなにか思い出したような顔をした。

「どうした？」

「いえ、無礼ながら、私からもお願いをさせていただきたく」

「なんだ？申してみよ」

スカリエツティは女性　ウーノというが、彼女に指示を出した。

これで大主教の画面には二人の人物の写真が映ったはずだ。

「これは・・・」

「次元航行艦隊提督、クロノ・ハラオウンと機動6課部隊長、八神はやて・・・」

大主教は恐らく首をかしげていることだろう。

「このもの達がどうした」

「この二人を・・・」

そこまでいって、大主教は少しだけ笑った。何が望みか理解したのだろう。

「この二人を、今すぐでなくても構いません。我々の邪魔をしないようにしていただきたく思います」

ラインハルトとヤンは首都図書館にいた。

ラインハルトも読書は好きである。昔もキルヒアイスと共に物語の世界を駆け巡ったものだ。

しかし、彼は思う。ヤン・ウエンリーの読書量は異常である。特に歴史、戦史においては。

「そのように過去のことばかり調べて何になるのだ？」

これは決してラインハルトが歴史を軽視しているというわけではない。先人から学ぶことも多くある。

「うーん、何になる、と聞かれると返答に困るなあ」

暫し考えたあと、ヤンは言った。

「過去に生きた人は自分達がやってきたことを記録として見ることはできない。だけど、私たちにはそれができる。私はただ、この贅沢な権利を行使しているにしか過ぎないよ」

そう言った後「好きなこともあるけどね」とつけたし再び本に目をおとした。

ラインハルトがハア、とため息をつく。

すると、首にかけているペンダント　デバイスのブリュンヒルトがぼんやりとした輝きを放った。

「通信・・・？」

『サードアベインF　23区画の裏路地で小さな女の子を発見しました！レリックケースを所持しています。指示を願います！』

部隊長室で惰眠を貪っていたはやては緊急通信のけたましいアラームがなった瞬間思わず飲んでいた紅茶を吹き出してしまった。

結構高いやつだったのに、と思いながら通信を受けたところ、仮面に現れたキャラに先のことを言われたのだ。

「今はどうしてる？」

『ビタミン剤注射を打って寝かしてあります』

ということは衰弱していたのだろうか。迷子？いや、レリックケースを持っていたのだ。そんな日常的に起きていそうな問題ではあるまい。

「わかった。そこで周辺を警戒しつつ待機！」

『了解！』

先程までの画面が消えるとはやては新しく三つの画面を出現させた。

「高町一尉、キルヒアイス一尉、シェーンコップ三佐」

呼び掛けにたいして三人は各々返事する。

「緊急事態や。各隊員に終結命令を出すように。それと、キルヒアイス一尉はヴィータ三尉、ハラオウン執務官と共に海上哨戒に出て

くれ。高町一尉も場合によっては海上へと向かってもらう」  
『了解!』

画面が消えると、上着をはおり、彼女は己の仕事場へと向かった。

キヤロの通信を聞けばこの休日がこれで終わりだと言っことがす  
ぐにわかった。

案の定、キルヒアイスから連絡が入る。

「どうせ休日が潰れるのだろう」

『はい』

はつきり言ってラインハルトにとって休日など無くてもよいもの  
だった。彼が求めているのは休養ではない。

『ラインハルトさま、何処と無く張り切っていらっしやいますね』

「どうしてそう思う?」

『イキイキしておいでです』

「私は残念だがね」

ヤンがボソツと入り込んできた。

ヤンがどう言おうとラインハルトは確かに元気になっていた。

やはり彼は戦いを求めるのだろうか・・・しかし、それも違っだ  
ろう。

日記

§月 日

疲れた!今回は模擬戦とかとは比べ物にならないほどに疲れた。  
少し怪我もしたし。

でも、一応任務は達成できた。良かった。

機動6課の休日 後編(後書き)

眠いよー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1819v/>

---

魔法皇帝ラインハルトStrikerS

2011年10月6日10時06分発行